貝原先生歳時增選
鳥飼洞齋翁編述

改正月令博物筌 全部

此書ハ甲子年彫刻スレトモ
艸稿駁雜ニシテ且ハ傳寫誤
少ナカラス故ニ此度左ニ錄ハル
諸先生ノ校閲ヲ經テ再訂ナ
シ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書ノ
正シクナリタルヲ好タヽヒテ佳依
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

一年三百六十日日
日無邦無故實時令
娯遊及國風偉哉抄
録收緗帙

筱應道題

採鄙幾葉細
工夫業就堪
供詞客府時
令天文醫托

出師表 仲未

帙分一巨蔡邕

它ヨ帳中秘

張說子生掌

裏雅寄語風

流多執子休

爲博物小人

儒

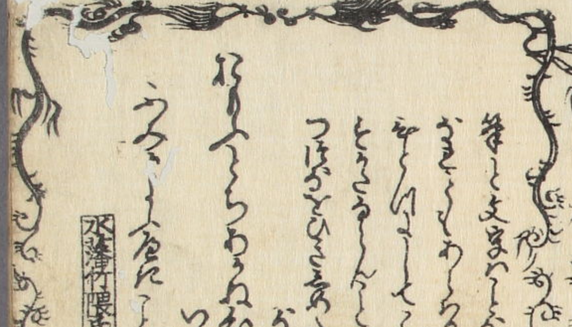
南豐題

日月爲生

事法瀚古性

孔子備式樣

爛 怪樂



水藩竹隈氏 道孝

世にあるものくるしみをたゝかれて
はるかに月をあはれとおもふ
水と月とにあそぶこゝろ
しられ宵にあり
ゆくすゑ
そのゆくすゑ

華洛 浮雲齋雙雅

世にあるものくるしみをたゝかれて
くるしみをたゝかれて
老しみさとこの頃
見うしなふこゝろ

月やあらぬ春をとも 井眉
のこるこゝろふれて

○俳諧大意 並口傳

一此書の詮とする処い歳時月令の正節と明らかにし改め暦○二十四節禮記之月令を擧め記し草木花実の時日と不差記を詩歌連俳の季節と定るものい相違ぜるりの有る故ふ各傍ふ月々用いる印を委しくしるす

一連歌俳諧者流ふ季と定め節く窓むることい原来懐紙一順の日渡しの為ふ二條家ふ於くその分置れしふ後普光園摂政新式と著し給ひ後常恩寺太閤追加しなまひ肖柏老人今案を加へられて其式既ふ定まりたゝバ和歌ふ年内立春い春をもしも連俳ハ冬ハ杜若ハ和歌ふ春をもれども連俳ふ初夏ハ牡丹ハ春ふも出一夏ハもぜーすのあり

連俳ハ初夏の景物と定既ハ
ハ切法師の句ハ
春暁うゑ花のこゝ汐や必ゑ巻
ゆ〻しく高くも深き訳有詩と
歌ハ一章一首のみく連歌を
百句はゝ〻ゝ名多誹諧又
式を連歌ハ擬を然ふ夏冬
のこゝろハ景物少く懐紙乃見
渡しゝゝろゝしゝずよりて古今集
の巻頭ハ年内立春あれど連
ハ冬と定雪月花の三つ夏ハ乃
ゑず故ハ燕子花牡丹をと夏
とん中々私ハさぐむ乃ゑさ車な
らゝびこゝをゝ多弱も季寄
の格ハ御傘ゑるい草ハ過ど
とゝや申ざんしゝと教文の内秘校
口決ハ及んでい文のゝゝゝを
厭ひ畧ぢゝこゝも多〻追て博
物筌補遺と出して悉く註ゝ
凡例終

引用書籍目録

此昏本文注解トヒ一々出處ヲ記サズト雖トモ一事モ安リニ筆スルニ非ズ左ノ昏内ヨリ抜昏ス此昏編述シテヨリ凡三十年ノ間儒者佛者和学者職原家哥人俳人天文者其外諸先生ノ訂正ヲ歴テ漸ク當年昏成

万葉集	古事記
日本書紀	日本歳時記
文徳實録	三代實録
拾芥抄	五家髄脳
延喜格式	源氏物語
伊勢物語	栄花物語
枕草紙	徒然草
北一代集	藏玉集
莫傳集	新撰六帖
夫木集	定家三部昏

頌和名	筑波集
大和本草	本草綱目
本草拾遺	花鏡
卿茉本草	採取月令
月令廣義	輟耕録
三才圖會	前後漢昏
階昏	唐昏
梁昏	後晋昏
字彙	爾雅
博物筌	五經
四昏	法花經
涅盤經	華嚴經
杜律	李白集
白氏文集	唐明詩集
文選	

引書目録終

月令博物筌　大意

一此書正月門松ヲ立ルヨリ年ノ終迄年中ノ歳事故事ヲ集ム上巻中公事故實ヨリ下四民ノ諸式法・月ノ異名・草木・魚・鳥・虫・獣等迄不残集メ来由故事ヲ述譯ヲ委クク記シ異名・漢名迄不洩集ム

一冊トシテ正月ヨリ十二月迄ヲ十二冊ニ分ルテ分リ難キモノハ夫々図ヲ出ス

一草木種類花形其外何ニ不依文ニ

一條毎ニ哥・哥ノ詞・連哥・俳諧・狂哥・詩・詩賦・故事ヲ夫々ニ委シク仰例證據トス

一生花ノ正式・衣服ノ正式・養生法・食物善悪・料理献立・年中ノ吉凶・米豊凶ヲ知法・草木植樣・菓物貯ヘウ・妙術・妙薬・風雨ノ考等何レモ月々日々ニ記ス

一年中ノ公事祭・草木・生類其外何ニ不依是迄俳諧ノ季ニ用ヒ来ル物ハ印

ヲ付ル但正月ノ季ニ有物ニ目ニ主用ル物ハ
㊀印ヲ附ル　十二月ニ如此其ノ哥ハ春ニ
成能ハ冬ニ成物ハ其條下ニ註解ス
一四季折々遊山詠水等ノ手紙ヲ其
節序ニ加ヘ尺牘ヲ多分ニ付ル上中下
ノ昏暁ヲ記シテ漢文ヲ作ル便リヨ
漢文浅学ノ人ト雖此昏ヲ見レハ
即時ニ文章作ラルヽヤウニ設タリ
此昏雅俗日用重法ノ昏ト雖元来ハ哥
ヲ詠能借ヲ作ル人為ニ攘公昏ヲ故
七十二候毎月六候ヅヽ出ス有来ル生類
七十二候也草木七十二候有他昏ニ無キ物
ナリ此本ハ出処アレハ委シク註解ス其
外是迄他本ニテキ季ニ成物多ク出ル古
哥ヲ加ヘ作例トス
一詩詩題・詩題・尺牘ヲ出ス詩作ニ便ル故
二哥人・能人・詩人・俳学ト雖失怠ニ備ヘレ
右ハ此昏大抵ヲ挙ケ示ス年中ノ事多
ク品類ナレバ一々例ヲ記スニ暇アラズ次ニ
門部分ノ大意ヲ記ス

大意終

門部分並目録之註

正月　始めの九の印は其月の干支・八卦の其月ニ當る卦・調子の其月ニ當る律呂・陰氣陽氣の生ずる数と記し次ニ其訳と解

節立春　此九の印の内ハ其月の節・七十二候・草木七十二候・昼夜の長短・日の出入外の方角と記し次ニ右の註解と委〳〵昏く

中雨水　此九の内ハ節より十六日目中ス・七十二候日出入其外昏ニ出ス夏節同

日令　此部ハ其月日ニ定リ有る事公義行事・年節・式日・諸祭・風雨の考へ養生の法其外日の定り入用の事と出ス

月令　此部ハ日の定まらざるその月一ケ月の事とあつむ

時令　此部ハ時氣拘ハる事と出ス譬バ正月ヨリ〳〵ハ初春・餘寒・暮春・三月等の事又三月ヨリ〳〵ハ

尽くるべく時候かやる事とのを

草木　此部ハ其月の草木と集む但妙茉ある物い病症用いやくと記を

生類　此部い其月の魚・鳥・虫・獸の諸の生類とあつむ

必用　此部ハ日の定まるべく其月一ケ月の養生の法・風雨の考・米の豊凶・妙術・天氣占候・料理献立其外入用の諸の雜事とあるす日の定なる事い口の日令の外ニあり

□故事い如此かくこの外ニ有白字ふしこる外も有

□此のごとくにい妙茉なり

○詩哥連能い始ハ此のごとくにあるーあり次ハ〇めぬ印あり

○異名尺牘い始めぬ印あり

○日々養生の法・風雨の考・五穀諸品の高下・季と時ハ諸祭・妙茉・妙術・詩哥連能故事其外日々重法ある雜事い部ふんれ多あるゆへ目録ふれの世を本文と見て知べし

正月部目録

△印い俳諧の季をとり物あり

○養生の法・雨風の考・米の豊凶・妙茉其外人家車室の事い知々ゆへ目録ハあるさん

幾端　春の興名　春の由来　一丁

正月　月支　謂子　三丁　陰陽生　興名

正月古今違　正　四丁

△立春節　正　四丁

△若水　正　八丁　月令　十五丁

△雨水中節ヨリ　正　十六丁

朝日

正月日令　此部ハ正月日の定まるべく支の定りしる事と集めあるす

△元日　正　十一丁　元日興名　正　十五丁

△元日賀　正　十四丁

△四方拜　正　十四丁

△星と唱ふ　正　十四丁

△屠蘇白散　正　十四丁

△朝拜　正　十六丁

△院拜礼　正　十六丁

△元日節會　正　十六丁

△諸司奏　正　十六丁

△七曜御暦　正　十六丁

△氷様　正　十六丁

△腹赤　正　十六丁

△國栖奏　正　十六丁

△歯固　十七丁
△門松　十八丁
△大餅　十九丁
△門神棚　十九丁
△雑煮　廿二丁
△太箸　廿二丁
△加賀御草　廿二丁
△押鮎　廿三丁
△小殿原　廿三丁
△螺者　廿三丁
△葩煎賁　廿三丁
△大福　廿三丁
△庭竈　廿三丁
△幸木　幸籠　廿三丁
△鬼治　功徳経　廿四丁
△星佛　廿四丁
△初鶏　廿四丁
△初夢　廿四丁
△三物能偖　廿五丁
△若餅　廿六丁
△羽子板　廿六丁
△毬打　玉打　廿七丁
△宝引　廿七丁
△書初　廿七丁
△毬ぜく　廿八丁
△三ヶ日　廿八丁
△春永　永日　永陽　廿八丁
△湯殿始　廿八丁
△ひち始　廿九丁
△鏡餅　十九丁
△注連飾　十九丁
△恵方　恵方棚　恵方参　十九丁
△蓬莱　十九丁
△料物　廿二丁
△閑豆　閑牛房　廿二丁
△鰊鄰　廿二丁
△俵海鼠　廿三丁
△海鼠　廿三丁
△柑鯛　鯛　廿三丁
△年男　廿三丁
△福藁　廿三丁
△福鍋　廿三丁
△鬼打木　廿四丁
△若戎　廿四丁
△懸想文賣　廿四丁
△稲積　稲ぐら　廿四丁
△三ヶ物連歌　裏白連寄　廿五丁
△禁園削掛　廿六丁
△破魔弓　同矢　廿六丁
△胡木仕子　廿六丁
△袖抽打　廿七丁
△年玉　廿七丁
△去年今年　廿八丁
△御降　廿八丁
△松の内　廿八丁
△藏開　廿八丁
△弓始　廿八丁
△馬乗初　廿九丁

初春　正月日の定まりざろ歳風とるうるうのとありひ

△着衣始　正ノ九ノ
△暦聞　正ノ九ノ
△春駒　正ノ九ノ
△年礼　正ノ九ノ
△鳥追　正ノ九ノ
△大黒舞　正ノ九ノ
△諷初　△万春楽　△春鶯囀　△梅ヶ枝詞　△青柳詞　正ノ九ノ
△乗初　△輿のり初　△駕乗初　△丹のり初　正ノ十ノ
△節　△節小袖　△節うろふ　△槌飯　正ノ十ノ
△鍬初　正ノ十ノ
△水祝　正ノ十ノ
△頼初　△鶴初　△舞初　正ノ十ノ
△御慶　△服新慶　△叔氣　正ノ十ノ
△歳旦句の説　正ノ十ノ
△初子日　△子日袴　△玉帯　正ノ十一ノ
△若菜　正ノ十三ノ
△七種若菜　正ノ十三ノ
△初卯　△卯杖　正ノ十七ノ
△初寅　△ふで始　正ノ十六ノ
△朝覲御幸　正ノ十七ノ
△三宮大饗　正ノ十ノ
△告朔　正ノ十八ノ
△臨時客　正ノ十五ノ
△天狗酒盛　正ノ十八ノ
△商初　正ノ十八ノ
△真那切初　正ノ十八ノ
△船玉祭　正ノ十八ノ

三日

△たうやく　正ノ十八ノ
△裏白連歌　正ノ十八ノ

四日

△鏡開　正ノ十九ノ
△福ひろし　正ノ十九ノ

五日

△叙位　正ノ十九ノ
△万歳　正ノ十九ノ
△天寿生身供　正ノ十九ノ　五ノ五ノ
△菜摘川神事　正ノ十ノ
△大元師法　正ノ十ノ
△女叙位　正ノ十ノ
△空也堂鉢叩　正ノ十ノ
△吉昏奏　正ノ十ノ

九日

△帳釘　△帳昏　△帳祝　正ノ十ノ

十日

△常寧帯神事　正ノ十ノ
△具足鏡開　正ノ十ノ

飛鳥井蹴鞠初　正ノ十九ノ
木造初　正ノ十九ノ

六日

△六日年越　正ノ十九ノ

七日

△白馬節會　正ノ十ノ
△御修法　正ノ十ノ

八日

△御齋會　正ノ十五ノ
△真言院御修法　正ノ十ノ

△御弓奏　正ノ十ノ
△七日正月　正ノ十ノ
△猿引　正ノ十九ノ
△女玉賜禄　正ノ十ノ
△異面富　正ノ十ノ
△居篭　正ノ十ノ
△夷祭　△十日夷　正ノ十ノ

△縣召除目　五三ノ二
△事始　五三ノ二

十三日
△花朝節　五三ノ二
△解鬚御粥　五四ノ一
△住吉御弓　五四ノ一
△削花　五四ノ一

十四日
△踏歌　五四ノ一
△頭挿綿　五四ノ一
△十四日年越　五四ノ一
△繩引　五四ノ一
△土龍打　五四ノ一
△三毬打　五四ノ一
△凝竹　五四ノ一
△御薪　五四ノ一
△赤小豆粥祝　五四ノ一
△平岡御粥　五四ノ一
△上元　五四ノ一
△元宵　五四ノ一
△元夜　五四ノ一
△祢冠祭　五四ノ一
△獅子頭神事　五四ノ一

十六日
△女踏歌　五四ノ一
△走百病　五四ノ一
△十六日櫻　五四ノ一
明神々詠　五四ノ一

十七日
△禁裏伶人の舞御覽　△鶴包丁　五四ノ一
△稚児神祭　五四ノ一

十八日
△賭弓　五四ノ一
△吉田社清祓　五四ノ一

十九日
△九日正月　五四ノ一

廿日
△廿日だんご　五四ノ一
△嚴嶋祭　五四ノ一

廿一日
△初天神　五四ノ一
△初不動　五四ノ一

廿二日
内宴　五四ノ一

正月令　此部ハ月の定まりさる正月一ケ月の事をあつむ

△外記政始　五四ノ一
△店卸　五四ノ一
△偶偶師　五四ノ一
△夷廻　五四ノ一
△初芝居　五四ノ一
△三節　五四ノ一
△歳且開　五四ノ一
正五九月の説　五四ノ一
正月男女衣服式　△さろう衣　△やるぎ衣　五四ノ一

時令　此部ハ正月の初春の時候うゐ事をあつむ

△初春　△早春　五四ノ一
△餘寒　五四ノ一
△春雪　五四ノ一
△殘雪　五四ノ一
△雪解　△雪ぐれ　五四ノ一
△春氷　△殘氷　△氷解　五四ノ一
△山笑　五四ノ一
日待月待　五四ノ一

草木　此部ハ正月一ケ月のくさ木のうゑとあつめたり

△松の花　△子ノ日の花　五四ノ一
△梅　五四ノ一

△土筆 正 公三丁
△福壽草 正 公三丁
△ゆゝ若葉 正 公三丁
△若草 △新艸 正 公三丁 △初艸
△下萠 △木の芽 正 公三丁 △木芽萠
△若根蓮 同根掘 正 公三丁
△蘖 正 公三丁
△木芽漬 正 公三丁
△水菜 正 公三丁
△薑 正 公三丁
△蕗薹 正 公三丁
△鶯菜 正 公三丁
△田とゝく畑うを 正 公三丁
△堀大根 野大根 正 公三丁

生類 淺ふい正月の鳥けだものの奥虫のゐいをあつめ〳〵寄

△猫の妻乞 △猫さ 正 公五丁
△白魚 △白ざ 正 公六丁
△朝鷹 △潮たか △佐保姫たかの其外鷹の種るい色々あり 正 公六丁
△鳥さゝる 正 公七丁
△浅蜊 正 公七丁
△飯鮒 正 公七丁
△春駒 正 公七丁

必用 此部ふい風雨の占。破軍の向方。取のとゝ〳〵。他行の心得。作事の吉凶。料理献立食物のうゝ〳〵等其外品々あつひ日の定まる事ハ口の日令の部にあり此部ふい日の定まゝる正月ゞ月の事をあつむ

月令博物筌發端

凡そ内ふゝ之ゝるゝ春の氣の旺ずる所と記するゝ月令曰天の陽氣下ゞ降ゝ地の陰氣上ゞ騰ゝ天地和合

交泰する故草木芽ゞち萠出発生そゝゝ委〳〵ゝゝ第二葉春爲生小〳〵

春由來

漢書律曆志云春者蠢也春蠢ゝハ物の動き生ずゝ貌ゝり○本朝ふゝハ齋部正通説云春之言發也草木芽發也草木萠〳〵也云月令天地和同〳〵草木萠〳〵動〳〵ゝゝるも同〳〵心ゝ万葉集第九

哥 山坂の久世の路の柳代ゝゝゝゝゝつ秋いちりけつ

是ゞ以て考ゝ合ゝハ芽のもゝと云説ゝ万葉集とりて據ゝとゝしゝゝゝ

徴ふ之本朝の古言古訓ノ云ハ万葉日本紀古事紀ふ考べし

或説ふ春とハくらハ晴とハ・空麗ふ晴るとハ心ゆるしとハ

春異名

太皞 青帝 青皇 東君 勾芒 蒼天 花蓋 迎陽 韶光 青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光

○太皞と云ハ唐土伏羲帝のこと木德の君なるゆへ唐土昔より世々ふ日本の年德神と祭こゝあく春ふ初ふ祀ふ禮記月令云太皞伏羲木德君云○青帝ハ春神なり楚辞ふ見ゆ○青皇も春の神ゝ青皇恩澤無窮限なゞ詩ふ作まる○東君郊祀志曰晉巫祀東君顔師古曰東君ハ日の神なり○勾芒ハ少皞氏の子重といふと木神也春の神也

○蒼天ハ太皞と合せ祭ふなり

○蒼天ハ氣の初て發して色蒼々なるとゝ

陽ハ天地の盛德春ハ木ふ有て木色青ふゆゑ以て青陽と云○陽和ハ白居易ゞ詩ふ先遣陽和報消息ゝ有ふ

夏侯湛が賦ふ春可樂ゆ綴雜花以為蓋ゝ云ふ○花蓋ハ

立春といふ云ふ○迎陽ハ美也云春の景色のうるはしきいふ稽漢書律曆志ふ媚景或ハ韶景ゝいふもたゞ一ことうや○琁通ハ續漢書ふ見ゆ

○解凍ハ礼記の月令ふ見ゆ

○新陽ハ詩學大成ふ出ツ

○微和ハ陶淵明ゞ詩ふ出ツ

○舉始ハ礼樂志ふ出ツ○歳始ハ公羊傳ふ見ゆ○蠢生ハ律曆志ふ出ゆ○木德ハ震宮初動木德ハ仁と有隋青帝歌ふ見也

春爲主 東方ハ

云ハ易の說卦傳曰帝出乎震震東
齊乎巽又曰萬物出乎震震東
方也又曰兌正秋也萬物所說
也これとこゝとに震之正春
〻明〻〻○陽ハ仁者の德ふ
して春陽の氣ハ仁の道〻す○
蒼天といふハ春の東方の正色蒼々
然として晴る故蒼天といふ○卦ハ
震にして震ハ木の象ゑ○色ハ木德
青緑と主る故ふ青陽ともいふ
礼記ふ春を東郊ふむかへて青馬七
匹を用ゆといふ○精ハ蒼龍といふ神ハ
体精ハ用也春の用ハ能發生と龍ハ乾
の用也て陽の靈ゑ能動發ー速ふ盛な
る象ゑ○少陽労陽少陰労陰の四象の
初ふて春の氣ゑ是ふ陽明厥陰を加へて
六氣と云○味ハ苦ゑ○肝ハ木ふ屬
し春ハ肝尤旺ゑゑ死氣肝ふ入る
△右の外春三月の季乃りのハ三月
の部乃ものゝ名ゑいゝます

正月乃部

異名

陬月 端月△孟春 發春
獻春 親春 開春 上春
初春 發歲 三陽 初陽 暮新月
新陽 謹月△太簇 夏正 睦月
かとみのその月 ゑの月
どゝの月 年始月 初宝月

異名註 ○正月を一月といふ正
月といふハ正しきやう
いふ義ゑり○正月を謹月といふハ正
月ハ始を謹むべき儀をもつて
○正月を太簇といふハ太ハ大ゑ簇ハ
訓簇々ゑゑむらゑ春の陽

氣ふて万物とてみ生ずる心あり
○陬月　とゝふハ亦雅言正月の支を
いゝ陬ハ寅のくゝみなり○夏正と云
唐土夏の代より寅の月を正月とする
ゆゑ名ぞくるなり○睦月　しゐて
清輔奥儀抄ふる如く貴き賤しき
むつまじくゆききするなり むつび月
とゝふを略してとゝふるなり○暮新月　とゝふ
年ふれて新しき月となり故名づく
○太郎月　とゝふ俗ふ人の子れ初ふ生
ゝるを太郎といふ故ごふ生きたる始
次郎を名づく故正月ハ初月故名づく

(哥)初春月　藏玉
霞こめるそらの春月の朝日うゝ
のゝしるこゑもやそふ名ゝん

(哥)初空月　後鳥羽院御製
春ハるかすみ立ぬるそらなれ
さえ冴ゆ春のそらの月

(哥)端月　御集
春ハ来ぬいくよをあゝぬまもむの
ひぢゝにかゝるゝ山の端の月

正月古今違

一年十二月の干支を定るハ其月の中節日ノふ星の斗柄建所の子支を以て定るゝ斗柄の柄さゝ所ところ〳〵いハ俗ろえゝん駅のゝんさゝのむゝ名ゝ

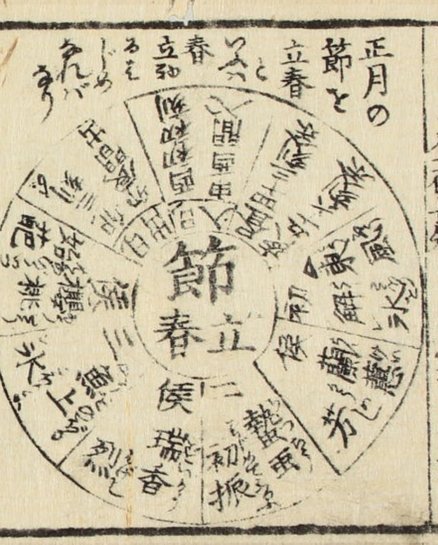
正月中　藏玉　星の斗柄寅ふ建故正月を寅の月とさゝむるなり

○唐土。夏。商。周。右三代正月別々
夏の國禹王の世ふハ寅の月を以て正月
今の正月商の湯王の世ふハ丑乃月を以て正月
くゝ殷今の上周の文王の世ふハ子乃月
と以て　今の十一月　正月と定むれをべて
一理あゝ支なり　天を子ふ開くと以て
周ハ子の月を正月と定め地ハ丑ふ開く
ゆゑ商ハ丑の月を正月ふ定む人ハ寅ふ
定るゆゑ夏ハ寅の月を正月とさゝむ
天地人間さゝ初ゝ乃本編博物誌さゝ心　其後秦しゐ世ふ
て古典を悉く改めて亥の月を以
正月と定む　今の十月　漢の演の代も是まゝ
しゝ武帝の時始て古代の通ふ改め
寅の月を正月と定めゝ　今ふ襲ぎす

本朝ハ神代より寅の月を正月と定め變ずる事なし此論春秋正月考
とゝくる書ふ委しおりろ紀
事なり見るべし

節

○立春○七十二候○草木七十二候
○晝夜長短○日出入等左に記す



立春天氣

立春ハ北方ふ
紫綠白の雲
あまたハ三素飛雲と云て三元
君天上ふ詣る日なりけるもん
て再拜とゝ必ど福あるく隙
書に見えり○三日晴天なまを
豐年○前後三日の間風雨少し
あまたハ其後四十五六日の間天地の
氣とゝのいて万物うるおりさかえ
又人の身も安全かて病少し
なり若又四五日ハ前ハ雨あまたハ
其後四十五日風雨ハ不ゝく四五日も

立春占候

後ハ風雨あれハ
早しとなるべし
此日四方ハ黄なる雲氣あまを
五穀よく實のる書きに雲氣あ
またハ虫五穀とやぶる○日いまゞ
出ざる時東ハ黑雲あまを春
雨多し西ハあまたハ秋雨多し北
ふあまたハ冬雨多し○東方ハ

青雲あれハ雨多し　赤雲あれハ夏ひでりに米乃あくてい貴し

立春雲氣

今朝云ハ日出時の事次の孔子を考ル

今朝雲行とそ豊凶をもろ雲のせんをん

魏史ニ出さ

立春雲氣定

甲寅　乙卯　丙辰　丁巳　戊午　己未　庚申　辛酉　壬戌　癸亥

東方　南方　中央　西方　北方

春寒　民病　豊凶測　旱　水

今日日中ミ一丈の竿を立て日影をえうす法

廣雅　芳譜

時ハ證とせ定り

一方ハ動を

立春

正月のせんきの元日まえ

(哥) 千五百番哥合立春　通具

今朝とてあれもの弥たれて
みどりにそふる春けしきかな

新古今

摂政大政大臣

みちの山ものとそ高く雪の
ふりにし里ふるるハ春よ久

雲葉　立春　人九

春とてあとをとつげに相坂乃
ゆふ日はけ春けあらいてそ春

千首　立春風　為尹

春ことや春なる波の岩こすけ
をれもをしをそ川ぐそをく

金槐　海辺立春　鎌倉右大臣

霞ぬの浦ぬ春風えむなり
ハ十ぬうけて春やうらん

草庵　立春氷　頓阿

なをなくふ波をうれて山川乃
岩越と波も春さらにけり

万代　忠見

春霞たつとの山月紙ひろげ
とうぶれあるたびごとにあやをりぬん　家隆

夫木　曉立春

わくゝ玉ぢくゝせのまろ乃和めこそ
ハこ永のもるもるさいこゝなり　六条有忠

亀山殿百首　立春水

年ごとにかりかねなくこゝろぢ
老せぬ春ぞたのゝ　西行

夫木

こゝ春山ま春ぬ春ぬてこゝろ世ゝ
こゝろりをたくくうぐひすのこゝ

亀山殿百首　立春天　後宇多院

ゝくゝの天れ春ゝ春ぬ春ぬ春
まくゝろゝゝの春ぬ春ぬ春ぬ

同　立春日　同上

見ゝの山れ春ゝれてまのくゝり
日ぬいけさもがを春ぬるゝゝ

夫木　山立春　知家

いくもや山天の春ゝり今いくて
あゝ高ま春ぬ春ぬいこゝたゝり

立春霞　素然

春のはのれもみどりのひゝゝれ
春ぬ春ぬ春ぬ春ぬ春ぬ春ぬ

詞　立春の詞のこゝハ春の詞。春ゝ春。ゝ春ゝ春ゝ。春ゝ初ゝ春。春ゝ春ゝ春ゝ。春ゝ春ゝ春ゝ。春ゝ春ゝ春ゝ

ナリ百姓皆倉春牛ヲ賣ルトイヘリ

泥牛 年内

ヨリ出テ牛ヲ作リオキ寒氣ヲ送ル月令ニ見タリ

綵

燕 歳時記ニ立春ノ日悉ク綵ヲキリテ燕ヲ作リテ宜春ノ文字ヲ貼ス

賜綵勝 唐ノ朝廷ノ制二立春ノ日侍臣ヲ望春宮ニ召サレ春ヲ迎ル人毎ニ綵勝花トテ作リハナヲ賜フ由文昌雜錄ニ見ヘタリ

農

祥正 農祥ハ房星ノ精ナリ正シトハ晨ニ朝方ニアラハルヽナリ

葭灰ヲ飛 國語ニ見ヘタリ立春ノ日芦ノ葉ノ灰ヲ律管ノ端ニモリニテハオケバ春氣至ル時其灰オノツカラ飛ヨシ委シク事文類聚ニ見エタリ

歌青陽 後漢書ノ祭祀志ニ云ク立春ノ日東ノ郊ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服飾ミナ青シ青陽ヲ歌ヒ雲翳ヲ舞フトイヘリ歌曲ノ名ナリ

詩 春五字對 同上

詔光開令序 唐ノ則天春時令ヲ受ク

惠風初應律

淑氣動豐年 春ノ溫和ノ時令

和氣正調梅

詩 立春七字對 詩礎

三陽候節金為勝氣象新 立春ヲ三陽ナリトイヘルヲ

百福迎祥玉作杯 年酒ヲクム

應陽春

若水 新水去年の生氣の方ヘ井を鎮めて蓋を〳〵て人ゝ汲せざ春ふの日主水司内裏ハ奉るべ朝餉ふたれをきちゝめま

なり 新玉の春さろ日奉ぎ若水とふ去年より井を封ぢ置ぎ包井開くるもて世俗丹若水を元日とする季くは廿三丁めあり

(和) 年中行事 支那各寺云ふ元日の若水ふるの彩やぎ山ふ水の彩やぎ山ふ義朝公の若水 河を若ぎ山ひとぎ天代の初めの若水 俊頼

元日立春

(和) 万葉 久方の天の原ゆ雪のとけ若水 山の谷の若水 建長哥合 立春 顕朝

(連) 春立てこがぎろの焼めふ 玄仙

(俳) ちゃ上ふ下ふ若水けふの春 宗因

(狂) 古今夷曲 哥慶

春ふ立てとふぎろうまや大ぶくの ふ乱も歳ふそけさいふゆ〜ん

○哥の詞ハ立春ゆて見合用ゆべし

(詩) 元日立春五字對句 同上

春城映朝日 緑仗迎春日

緑柳揺春風 細煙接瑞香

(詩) 元日立春七字對句 詩礎

瑞色含春當正殿 轉緑蘋

香煙捧日在高樓 瑞色新

瑞氣朝浮五雲閣 紫氣中

朝光夜吐萬年枝 曲迎春

春風掩映千門柳 四海中

暁色融和萬井煙 象昭田

(詩) 元日立春 節埴

散臘迎新淑氣田 一年程ナク暮レテ

又春二立ツカハルトナリ 乾坤此日泰初開
正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハレ地天泰ノ卦トナル其始ハ元日也
庭前積雪徐々化 天地ノ陽氣ヲ得テ
雪モノロクトケヌメルナリ 天上和風習々来
ソラヨリ吹ク風モアタカニメヨク吹来ルナリ

年内立春 元日ヨリ三ヶ日ノ内ニ春ノ節ヲ迎フル連俳
ハ十二月

かい十二月の季と定むしいんた
和哥の式さ嶋七此處よ出を

哥 續古今 入道前太政大臣
君ぬ見ん山い四とめるるもはし
ちれ間ある春乃あけぬの

詞 春の内ふ。春ようきたる。去年今年。今のさきふ。さ川ものてそ春
ながら。春四ものさ川。ものるとし。
年の海りに春立つまもくるとふ心。

連 歌をもまて春ようきたる 宗祇

俳 歌ようの屋根ようの下ヶ二月ヲ婆
春ニツ見おろを家ちの一枝ちり 淡々

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスムサカイハモ
トヨリ長生ユヘ日月モトコシナヘニメグルナリ 送臘迎春亦寂然 冬ハクレ春ニウツレトモ何ノ
コトモナクモノシヅカニシテ各別ニアラタマリタルコトモナキトナリ
翠管銀鈎傳故事 仙宮ニ楽器ヲモテアソブコトハ常ノコトニテ故事ヲアラタ云ヒツタフルナリ
金花緑勝作新年 金銀ニテ花ヲツクリ臣下ニ賜

疫病を除く方

立春の日蔓菁を搗きぬり汁を
子のとりあさ先て家内とを
小服をれば疫病を除く

中

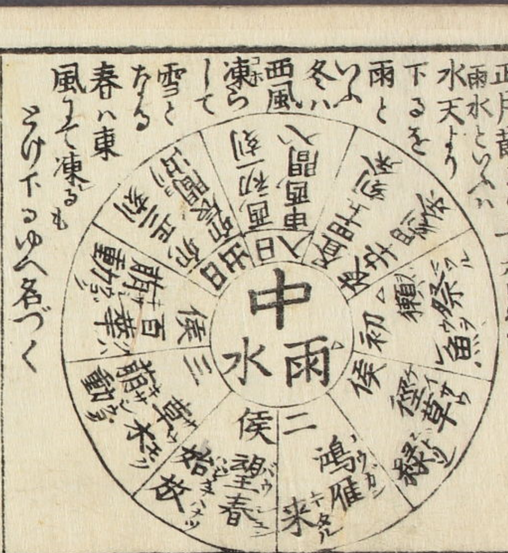
七十二候○草木七十二候○日ノ出入晝夜長短委〻く左ふ記を

正月節より十六日めと雨水といふハ水天より下るを雨と

冬ハ西風凍らして雪となる

春ハ東風うそ凍るも

そけ下るゆへ名づく



獺ハ常ふ魚をとりて喰ひ命とはすぐゆへ其恩を報ずるゝて春のち〻

ゑふ魚をとりて祭るるゆ

○徑草ハ道辺の草也青々と成鴻雁ふゆゝの事〻陽氣ふるれい次第ふ南より北へ帰ゆく○望春始放と云支草木百花陽氣ふ惠れて梢萠立ち萠し動く

朔 桃の花ふ笑ひそめ蕉翁

日令

朔 元日異名十四有

日註證意八十有

鷄日

今日を鷄日といふ東方朔ゝ占書ふ出て八日迄悉く名あり其日天氣和順なれば其名づくる所のものさかるとあきらも其理通〻が〻此事貝原先生日本歳時記ふ委〻く記あり見るべ〻面白き事なり

天氣

元朝ゝく大雪ふ六早年とあるべ〻○晴天

なれば年ゆたかなりて人民安し
風雨なれば米價貴し○微風
細雨あれば梅雨の内日和長し
秋洪水あり○三ケ日の間風雨
なくなりて日色と見ざれば一年
の大美をなすなり○四方晴天
自然と和氣ありて春のけしき
うらかなるを豊年とす雨ふも
あらずして黑くくもりて陰々たる
も又美なり○東風吹く夏に至
りて米價賤し○南風吹く春
より夏ふくうて米價いやしく
又旱をなすなり西風ふけば春
より夏の米價貴し豆ハ能實
のるべし北風ふけば水の災あり○
今朝東北より風吹ば五穀熟し
て年豊なり西南の風吹く大水あ
りて耕作のさまたげとなる東南
の風ハ南風ハ吹ば雷鳴て寧
からず○今朝北より大風吹て
春の中人民病あり大風なり
ども北風吹ば春の中多く病あ
るべし○終日北風吹ば其年とく
に病のなまいある事あり○南
方より風ふけば旱ばの事なり
○今日大風吹ば蚕破れて糸の
價貴し又五穀ともに不熟○天晴
ふ暖なれば風ふかざれば五穀よく
熟して米價賤しく人民安全
なれども病もなくゆたかなり○今日
雪ふれば豊年又旱ばとなる

占候

元日晴
なれば米價賤しく或ひは人民疫
病を煩ふなり○ふれば米價
貴し或ひは人民病あり雨ふあ
れば四十日の旱なり下にあ
なまが絲の價貴し　蜻蛉
あれば麦粟魚塩
成ふあれば米價貴
の價貴きなり或ハ旱りとる事
四十五日なり巳ふれば米價貴

く或ひい蚕あしく或ひい雨風多〜庚かあれば金鉄の價貴〜或ひい果実のりあしく又い人ふ病あり辛かあれば麻麥の價貴〜或ひい稲大なる災あるべし壬かあれば米麥の價貴〜癸かあれば稲ふ災あり或ひい人民疫病を煩ひ又い雨多〜

十二月

晴雨考

元旦ふ水茶碗ふ一杯汲み其日を吉とす二日ふも又水茶碗ふ一杯汲み目をくけあるべし

水元旦ふ高水なれば重き時い其月雨あるべく輕きと知い晴なり二月三月四月と次第〜ふとりて十二日かあて見まぢ十二月までの晴まで〜雨

元朝八方の風を以てその年の美惡をうらなふこと漢書より出さり

風はよくれば考へもはよ〜

元日賀

今日を賀とする始い本朝ふてい神武天皇の御宇より始る唐土ふてい漢れ世うえ〜めてさまを方ん日本ふうい四百年をとり後のあとく

元日異名

註 證哥奥ふ

三始 三微 三元 四始 元旦 三朝 正旦 春旦 雞旦 雞日 正朝 泰旦 詔節 嘉時 初正 初陽 更始 履端 天臘 上日 聖日 改旦 歳旦 三元三 年頭 初年 新〜き年 明る年 年立おく 玉の年 年の始 三の朝 日れ始め

四方拜

元旦の寅の時皇の屬星を
とゝのへ天地四方の山陵を拜し
ゝゆゑい年災を拂ひ宝祚を
祈ゝ申さゝる事ゝ侍るゝや
清涼殿の東階の前ゝて屏風
とゝそ白木の机ゝ香花を立
行いとゝかり
うゝ 公事根源 星とゝるゝ 年中行事 袁氏説
合ゝいゝ當年の星本命星
をまゝり七返ばゝとゝるゝゝ事
ゝそとゝいゝり今在家の世俗星
佛ゝて祭るゝ其ゝゝろをゝ
ゝるゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとゝゝきの星をとゝるゝゝ
光ゝりのゝけきゝ
ゝゝゝゝゝゝ

供御藥 天子

書の御座ゝ出御ゝて御衣
を御生氣のゝゝの色ゝゝゝ
さゝゝて菜子ゝいまゝ嫁
せざる小女ゝ先呑ゝゝ

屠蘇ハ小児ヨリノミ初ル 其後銀器初ルヨリの故小女ヨリ初ル

ゝゝゝ屠蘇ゝ奉る三献ゝ度
ゝ奉る二献ゝ
白散をすゝ免奉る三献ゝ度
瘴散をゝそまゝるとゝ
年中行事 毎ゝ
菜ゝいゝゝゝゝゝゝゝ

屠蘇白散 嵯峨天皇の弘仁年中に始て

これを行ゝる一人ゝゝゝと呑ゝゝ
ゝ一家ゝれを呑ぬ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
記ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ間里ゝ来ゝゝ某一貼を贈ゝ
紅の袋ゝ入ゝて井中ゝゝゝ
置扨元日其袋を水中ゝゝゝ
ゝゝ酒ゝ和ゝてゝれを呑ゝ瘟疫
を病ゝゝゝ屠ゝゝゝゝ
蘇ゝゝゝゝゝゝゝゝ邪氣をゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝとゝゝゝゝゝゝ人の神とゝゝゝ
とゝゝゝゝの理なり醫家ゝ多く

上ゐ点を加へて屠蘇と書くゆへ忌避て戸ふ書くといそ
ゆへ忌避て戸ふ書くといそ
此某方ムりく十二月の部ふあり

(俳)新のまに冬のまを[illegible]

(詩)屠蘇酒

・紫府僊人授寶方 紫府ハ仙人ノ住ム所ナリ宝方ハ屠蘇ヲ指ス 新正先許少年嘗 屠蘇酒ハ年始ニ先ツ呑初ルナリ

・八神奉命調金鼎 八神ハ八将神一年ノ命運ヲ調スル金鼎ハ屠蘇ノ酒器ナリ

・一氣回春滿絳囊 一氣ハ天ノ氣ヲ絳囊ハ屠蘇ヲ入ル紅ノフクロナリ

・尺井霊液夜流千 晦ノ夜中井ヘツリサゲラヲクヘ

・春風曉入九霞觴 九霞觴ハ仙家ノ杯ヲ便

・將鳳曆從頭數日 鳳曆ハ春初ヘ日々杯ヲ持テ明瞿祐

・卿屠蘇酒ヲ酌テ醉テタノレムヽ

・持杯訪醉

朝拜

(朝賀)奏瑞ふ朝拜

拜ゝ申さるゝ事ゝ略儀ふてゝ殿上ゝ小朝拜

公事根源 神武帝元年正月朔日柏原の宮ふ都を立位ゝ即ゆへに道臣の命等天瑞ど奏せるゝよ

ゝ起まるふゝ日本記みあり

(哥)新撰集 たゝゝやばゝかげて
かゝ糸のゝのむゝもゝたゝまるゝ

(朝賀)主中行事ゝ

ゝよゝゝ[illegible]

ゝ小朝拜 日ゝ[illegible]

(俳)松脂ゝ[illegible]

朝賀ゝ[illegible] 喜清

院拜礼

同時

仙洞にも行ひゝゝ捨芥抄ふ云く院糸の人々院の御所ゝ拜礼ある事ゝゝ

元日節會

(宴)諸司の奏

(會)七曜御暦

氷様腹赤国栖奏　ふるまつりの事
と元日奏聞すゝ後ぶの奏聞
をえてのち紫震殿ふ渡御ゐて
百官ふ酒をなまふ　(前)六首歌合
(前)ゝゝゝゝ神祇つゝめる百敷
ゝ
ゝ代をぞまちえみ
ゝ
ゝ和春の々ふいかこれみこのう
のべよとゝ代のまゝ
ゝ

諸司奏　元日節會の事ぐもを天子に
奏ス

七曜御暦　七曜暦とハ日月
奉ル　木火土金水の
七曜の事と書ゐるよのつゝの暦
ゐりまを節會ふ奉る事え

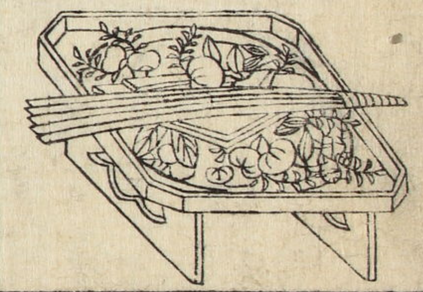
氷の様　聖の御代ふい冬氷りの
ありくゐる様あまば
去年の氷どゝうて室ふ納ゑ
節會のはいてふ奏聞をゐる
其時氷りの薄さ厚さを是ぐ
石瓦のゝしを奉る事ゐり延喜
式ゐ氷池風神の祭して氷れる
き年ハ大法秘法と修して行ふの
事ありしゝ　仁德天皇ゐゐ
まれて　(前)年中行事　ゐりぬ日ぞもるゝハ
ゝのいゐるもの池の氷ぬゐ紙ぐを
(詞)おきあまる代。きゐる年。去の紙

(俳)時淳ふ人夏ふ
ゐてや氷の様好道
膜赤。腹赤の
贄ゝも云

鱒といふ魚をゝ
奉ゐと昔ハ節會をふ供ゐける
(前)年中行事　紙去の子代ゐ
ゐりゐゐふゐまるゝ

國栖奏　應神帝芳野へ行
幸の時芳野の奥
國栖といふ厚の者桑ゐて醴酒を
奉る其後毎年桑内して年魚やゐの
りめと奉ゐ歌と諷ひしゐ今も
桑内ゐる事ハ。今國栖の奏と歌
うたい笛と吹ハ芳野ゐ桑ゐ心ゐ國櫂
(詞)芳野。君ふ　年魚献ぐ国栖の奏

歯固



もちがゝみとして餅を鏡として向ふしの人ハ齒を以て命しるゆへ齒の字をよりひももよむよそひをかゝむるようなり

高杯六本に折敷をそへ一の墓小大根橘とゆずりは此餅ハ近江の火ぎうの餅を專ら用るなり当ぶよりを哥ふ鏡山を寄てよむ

なり在家の鏡餅ハ毛ぐゆづり葉をそを侍るハ清少納言ゞ枕草紙よゆづり葉の事をいふとてまゝよりひのゞるえぐさめのぐはしてはをひたをるるをく一名を親子草といふよう藏王集ハあり（歌）享

おもふこのやかぐ夜の山とゝそたをまバかひなれ花ゆゑ知代ゆゑ此紙を

るゝぐてわをんと祝ふ後のりのひをゝ

（詞）りのひのかぐ足餅　齒乃果ゆづり葉。うゝ白。大根祝かぐ足者。

ちやこ草。よりひのくさひる。やゆくさ

（俳）齒固ゆゝむへきぶいろ長袴　裸虫

（狂）ひそてて花のかぐ足さるる餅いひびくるとやくるとやくるとしるん保友

鏡餅　神ゝ供る餅を鏡の如く丸くをを故名ゞ云

門松　△立松△ぎう松△かぎう竹△松かぎう△門の竹へ門かぎう

門松之圖

松は千歳と契る世は万代と契る
ゆえに年始の祝ひ用ゆる
一条禅閤の御説に又松は十返
ゝして百年に一度花咲ても春也
千年ぬるとも有て年の始に用ゆ
(三)新六帖 今朝はいとゞ門ぶ
なそなて行今ぞ年ぞ
詞 花の姿。民は家。民の戸。注
連。百歳の庭。年の。
路。ゆのぐ。ゆとも。
俳 二月ゝ
門松ゝ
狂 俳つ
ゆる家は正月は来り 一休和尚

藁盒子

藁にく小さに畚ゝ
物と拵へ門松ゝ添物

餅炭

土中に埋りても久しく枯も
本草ゝ
邪悪と避るとあれは用るゝへし
俳 ゝ月

注連餅

餅縄 土佐日記ゝ出ゝ
注連ゝ
ゝ○神社ゝ常ゝ
ゆへ
ざる心と用ゆ正月の季ゝ
俳 月の餅形ゝ
餅ゝ河
ゝ則重

大餅

松。竹。炭。縄其外
正月ゝ物をいふゝ

歳徳神

恵方

此方角ゝ
年々の恵方
ゝの年
ひのゝの年
亥子のゝ
余は是ゝ

ゝの方

婆利賽女の神と元方ゝいひて
ゝ雑煮ゝ供へゝ
ゝ方 茶 ゝ方
俳 徳 四方ゝ

(狂)[illegible]早く左の部月
[illegible]く神のけまへ人ゐ作 一枝

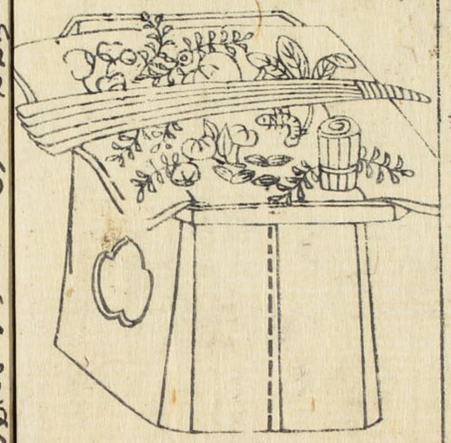
門の神棚 在家の妻戸ゐ棚を
器ゐ灯ゐどそる かまへて祭る夜ハ五
え傍る事多り

蓬莱いろふ

蓬莱島い仙人の住處ゐて此處の
菓物と喰へい不老不死ゐ至ると云依て
年始ゐ命遠久と祝ひて三方ゐ種々
の物とつミ重ね蓬莱と名づ者祝ゐ

(朋)蓬莱やそれ上ゐ海とや 可友
○圖とる処ハ諸礼 家本式の通りく

蓬莱の図



(狂)仙家にもたのもしき[illegible]
蓬来殿む着ぬけの 朧月山人

△蓬莱 三方ハ臺のあらし
ろ所と正面とる之

△橙 実とむすべハ七八年ものを
代々つく故祝ひの物ゑ

△穂俵 [illegible]

△搗栗 搗の字と勝ふりへて方事ゑ
かちくる心ゑてやゑ

△みかん

△梅干 梅宝珠といふ
玉の心ゑていふ

△榧 [illegible]寿命
とのゞる物ゑ

△柑子 △ころかさ △昆布 乃〜

△柚 △野老 △海老 △橘 △串柳

右の品々かざる心とよむうかゞるゑハ
春ふて元日の季ゑ右乃内委さ
由来のある月のハ次ふ入りくもろ

(狂)みゑ見たるくとろの名
[illegible]

△食積 蓬莱の餞ハ[illegible]
出度ゑの故蓬莱の積ゑ
る菓子のと喰ゑ長寿を潤ん心ゑ

(朋)ろくと餞積ハ 嵐雪

(狂)[illegible]蓬莱さん[illegible]
[illegible]ひとりのこひつゑ 丁二

海老野老 二品〜も老の字を
あやうう用るゝ
殊ふ海老い腰のかゞみ〜ろめみ
ようよひ長く腰のかゞむまて
長命ふて老ん事と祈ゝ祝ふ
(俳)いせ海老の傍ゝもゆし神の春親重

神馬藻 神功皇后異国と
ゆゝ紀船中馬秣
よゝて海中の藻を取て馬ゝ牧へ
神馬草と名づく名付ゝて年徳
神の馬ふよゝてこれを傍ゝ
又和訓ふ穂俵といふを以て穂も
俵もめてゝ紀物なれば
ゆゝるゝべ〜民俗ゝ
つゝとゝふく(俳)ゝゝゝや
祝儀表もゝ表の長

橘 冬も緑
変らず其実赤さ
祝ひの物ゝ
橘の姓を賜ふ

諸兄公ふ始て
(俳)橘いらみよゝきゝの傍りゝる安正

歯朶 裏白 歯ゝよりとゝみ
山ゝさ
長くそゝとのゝるゝいふ意ゝそ是
を用るゝ其上歯朶い雪霜ふも
ゝ青きゝのゝ
い春の祝ふ用るゝ

杠 親子草
代々を譲ゝ子孫長く繁栄の儀
とゝうて橙杠と並べ用ゆる代々ゝ
ゝゝ其内ふい死ゝ
死の字ゝ〜ひの人ふ忌思ふべきゝ
ども常とゝて人驚く事ゝ
唐ふおりゝゝ嘶有十畳の座敷
を建ゝゝに折節天台の淳慈寺
ゝ書記濟顛〜ゝ僧の通ゝわい
せ〜に主人ゝのゝそ今日家移ゝ
ゝば吉事の祝詞とのべて王ゝ
諫ふ濟顛〜ゝわへど大音ふ云く
子有て親死〜夫死〜て婦死ゝ
此ゝ〜ゝ千口の葬と出さんとゝ
ゝゝ走ゝ出られゝゝ主人甚ゝ怒

つて新宅の祝詞をのひ却て死
さいの葬とゝ追ひて一棒と與
来さく僕ゆ金す其中に老人有
て申るくはれ大ふ吉語なり必ど
怒りのゝべうびゝ子有て死せバ子孫
を絶ト夫死て後婦死せんこれ
順道なりこの十畳の座敷よ
り千人の葬と出さんこいくた
くれ年数を歴むんバあるべき事
にあらずゝ皆目出度語ハあら
ゝ様ゝいふゝ紀主人大ふさ
うて済顛ハ凡僧ふあらさ
事をありますく尊びけるや
うやうとりれて世間の物忌ひ
まるあゝ公中ゝるべし

(易) 新撰六帖　有家

春こふに名もかゝるぬゆづりもの
ゆりるとれたも君がゝえんこそ

(俳) ゆゝり茅あやひ井ふ
家の大ゝさう　親重

雑煮

冬年に制し置る餅を
種々の品を加へて美くして
喰ふ其品國々家々の嘉例あ
りそ大同小異ありその加ふ品を左に記
○芋頭・大根・芋子・焼豆腐・かち栗
昆布・あわび・煎海鼠・ちるめ・きき
る・井房・あゝめ・鰊・鰊・田作・
(俳) 粉さゝ織ゝ紙・紙・蕎麦・ゝ・ゝ・山宗阿
(狂) 猛ふ雑煮とゝ和人いゝで
腸のゝほゝや春さゝるゝん　ちゝす

羹祝

羹ハ雑々調ハ煮ゝるあ
ものゝ公云ゝ即雑煮の事ゝ
祝ふと云ひて結昆布祝ふ　むゝびゝるゝ
元日ゝり云心ゝ昔祝ゝ

芋頭

万事の司頭ふゝる心ゝて祝ハ
ゝ又頭ゝくゝ字ハ大学頭藏
人頭ゝ　ゝゝゝゝゝゝある人乃名ゝ
ゝふゝ元日ゝ祝ふゝる在ゝ

粉ものの

△兩のゝゝも書ゝ年始に
遺ふ小かゝゝけの名ゝ

△大箸　△羹箸と云　おまざるやうふ
年始の箸ハゆゝしを用ゆる

開小豆　豆と水煮あて大根と酢こそいてあへて雑煮
祝ふかさわゝにそゝくると云開く
といふいはいのあしくるべし

開牛房　豆と同し心へ開いて皿
ふるいへ名つくるべし

加賀御竹　内ふて餅の上ふ
そく大根をいふなり

(三の)　春
さいかの中にもまさかみ茂
やがてさいかぎふそゝあえはるゝ

辣鰭　子孫の繁昌ふとそへ祝するゝ
(俳)数の多式三箇ハ　光嘉

押鮎　鮎ハ異名年魚とのふ押鮎ハ
塩あもそ年始ふ用ゆる事

江淡第土佐日記見へたり

俵海鼠　たゝごゝをいふ生海鼠
なりこんと串ゝとゝと余多あり
(俳)ゝゝゝ

(狂)春来れば色も香もあらそ
花のたぶくろかとみるか　入安

△若水　井華水　若水桶　初手水　井閼伽水　若水の事

公事ハ立春ハ汲む水をいふ
連能ハ元朝くむ水をいふ　玄仍

(連)うら竹等も表ハ水ハ元朝　冬門

(能)春あけむとの星の砂ふる　冬門

△福菓　福菓　敷もいふ　庭ハ

とあき物と喰ふ　浄土ハ

△庭籠　民家庭ハ　新

(俳)庭ハ　年も暮　ていふ

敷ハて張ハ民の庭かまど　芭蕉

△福鍋　福鍋　年始の祝詞

て年始の祝詞

△幸木　幸籠　木の小枝を折て夫ハ

魚鳥菜菓どの

て竈の上とかうとさいふ木ハ

かもぶ〜今もある事ハ

△鬼打木　大賀　王の木　門松の影ハ木

門松の影ハ木

年木とて正月始ハ疵ある木と

うら末ハ葉と残し門ハ

ちくく鬼打ハ

ある陰氣をはらふの義

△毘沙門功徳經　多門天　神

うら昔ハ陰陽師のもとから民家へ

来て札と納め御經とるへ跡ハ目

出度ハ云ておく

きとく今ハ絶う

△若戎　元朝ハ

くと買おさえて祝ひ祭るなり　賣あり

(俳)とりて年ハ　右松

ハえ初や作とまづ　神魚　星雪

(狂)的年ハ　其年の属

ハ小祝ハ　春房

ハすうら

の像を星佛とい

△星佛　其年の属　星九曜星

悪想文

賣　懸想文といふは元日寅の刻より町々と賣て通る赤き袴立烏帽子にそあうくゝ是は女はうのめで錢をあゝ上げまゝ洗米とあゝ入るるゝ今よりてゝ皆祝してゝ

あるべゝとゝいふて皆祝してゝ

あるべきやうに祈る陰陽師の祝文なり　これで元来は艶書のたゝ

（俳）人いとれと長いかけさうゝ

（狂）いかるとゝ少い猿いとしくゝと

約の下まだけさうゝ貞徳

初雞　元朝のとうれ声なり（俳）一

蒼ふ耳よりそゝ夢　望一

稲積　い稲と稲ぬうをゝ積いた

のきをたうとめる心なり

元日の寢ると云ゝ一説三ヶ日とも云。

（俳）後撰や秋のゝ歌と花の春　子周

稲あるる　稲つびと同ゝ心なれもあ

ゝ故と思ふ心多ゝ

初夢　大晦日夜より元日あけ

つきまつるまでの夢ゝ

（宗）　夫木　西行

年ゝ年ゝ春来べゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

（俳）和義や丁固が例と松ぬうり少蝶

三物連歌　元日宗匠の家

旗ゝられどりてあ

ゝゝ者或い弟子集り句とあゝ

第一句と発句ゝゝ第二句と

脇ゝゝい第三句と第三と

いゝ三ゝまゝべゝるゆへ三ゝ物

ゝゝゝ是と板木かゝりて

市中と賣ゝる事あり今ゝ

ゝゝ事ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ宗匠

の家ゝ例歳の式ゝゝゝゝ句

と作るゝゝ　裏白連歌紙を

連歌ゝ四枚の懐紙ゝゝ中

古あゝまゝて片面と書脱

又一枚と添て五枚とゝゝ

のゆへ片面白紙なり
是と例して かく名付さり

三物誹諧 右連歌同じ又裏白俳諧も有

元日異名註 正月朔日と元日といい

元といふ字なれば元とよむ也
なれば日といふ事へ元三
といふ事い年月日のもとめと
いふことへ四始といい年月日
時の始といふ事なり履端と
いふい履いふむとといふ字端はは
じめといふ字義なり春へ四時の
初めゆへなれば元とふむといふ
事にて元日と履端といふへ新
王乃年といふい改る年といふ
なべて万葉かい荒玉の年や
あり玉といへるもの内なれば年の
内なれば年のもの名ふ祝
いふゆかくいいふなるべし

元日 歌連俳 狂哥 詩 手紙 いろくいろに
故事

夫木

九重やあらく庭ふむしるしの
そでをつゝめる子代の和なる
光俊

新撰六帖

今朝ふれば雪のあとにあらすり衣
くるたちそむる彩のまゝ風
俊成

家集 元日聞鶯 西行

春のうゝて五そくる春の松ふきそ
まの戸あけ告乃しるべ

夫木

為家

年の内ふ去い立しとあらしたの
そでもとくよいかなとむそしふ

六百番哥合

慈鎮

百敷や去ぬむうるさうにらに
ふるみふとせの新でうつまる

拾遺集

赤人

きのふそふいとれしけ去ふそ
ふしかくしふよやふよふ

三朝

道遥院

立かふる去いふふ
月日れそ先ちのけ

詞　子代ばらぶ。星霜とある人る。
くさ雲くんむ春のそれぞれ新月
うげ　天のそあ高。あくるあの
春来る高ゆくく霞くぶく。
元ものどうふいそくふと越きうぐ
いとさそくふまい年ハくうとろづ
代のくる高　君が代（謡曲名）けさの春
くふの春四方ハ春こ二つのあと明る
年。春くくふ和そう。新き年
連　春春くう沼ふもくや試の海昌林
鶯の声や移山のくふ乃春昌休
春ぶ色春もいき初霞外宗長
地くる神ひあ山春ハ紹巴
ふくて春ハ春井海春翁肖柏
俳元翁や神代のゆもそうく守武
十徳やけ世姫さくふ乃春友元
春くの日をくうくの始くる和及
初メの人もぶしと翁雲宗因
元日に田毎ハ日をそ春礼芭蕉
沼ゆうぐ海に仕うりけさの春　仝

元日詩　五字對句　同上

百霊滋景祚　花押三春節
萬土慶維新　江山四望雲

元日詩　七字對句　詩礎

春帰鳳沼恩波暖　日月光
禁中ノ例ケ
暁入宛鳥行瑞氣寒　建寅春
花堂翠幕春風至　萬國同
繡閣金屏曙色開　繞黄圖

詩　元日詞　張說

元日今歳樂今年ハトリワキ
春ヲムカヘテ安
楽不謝往年春去年ノ春ノ楽シ
コトカハ知尚来心道来ノ年イ
リレナリ　命
ウ誰為昨夜人情今朝人
ランヤ　ユタカニレテ

昨夜ニハ似サルトナリ

詩　元日詞　○蜀地寒猶暖外地ノ中デ蜀ハ寒氣余所ヨリ暖カナリ正朝發早梅都ハ已ニ梅花発ケバナリ偏驚万里蜀ヨリハ又暖カナリ客コレヲ見テ蜀其外外国ノ旅客又驚ク已復一年來春ノ早ク至ル今又一年タチケルカトウタガフナリ張説

詩　元日詞

元日賜群臣栢葉唐ノ制ニ元日椒栢ノ酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ武平歳時記ニアリ栢ハ仙茶ナリ綠葉迎春新栢葉ノミドリモ春ニイヨク色ヲ添ヘ寒椒歴歳寒冬ヲスギ來リテ枝葉トモニ寒シ願持栢葉壽仙茶タル栢葉ニ壽キヲアヤカリタシ長奉万年歡恩賜ノ栢葉ヲ捧持シ長壽ヲ奉ント奉和正日臨朝應詔天子朝廷ニ臨ミ玉フ御製ノ詩ヲ和セヨトノ詔命ニ應スルナリ　楊師道

詩　元日詞　右ニ同

居間無賓客蚤起只如常間地住居スレバ春ナリトテ賀シ来ル賓客モナクロハ朝トク起キ出ルハ平生モカクノトホリナリ桃板墮人換桃符ノ製モ人ニカセテカヘズ定ターハナキヲ梅花隔年香年ノ内ヨリ発キ白フナリ春風回笑語雲氣上豊荒和風ハ人ノ笑物語ルニ似タリ祥雲ハ富貴ノ上ニタナビクグ栢酒何勞勸心平壽自長心中平和ニシテ正シケレバ寿命自然ニ長クナラン仙茶ノ栢酒ナリトテ飲イテスムル苦労ハ無用ノコナリトゾ

詩　新歳戯作　室鳩巣

莫笑腐儒生計貧儒者ハスギワヒノ手ダテニ貧シトアザケリ笑フ無用トヽ今朝冨貴耐迎新中々貧賤ニハナシ今朝冨貴足ヌ間樂瓶裏一枝天下春栢ノ上ニ書ノリテ此上ノ樂ナシ瓶ニイケレ梅ノ一枝ハ天下ノ春ヲ迎エ富貴至極トスベシ

詩 壬午新年　同　龍艸蘆

雪後庭前柳絲黄春暗生雪ハミレバ庭前ノ柳ニケリ絲ヲタルハ葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシナリ

預知佳客到喜鵲兩三聲

鵲ノ声ノヨロコバレク啼ヲキケバカヲテ年始ヲ賀シ来ル珍客アランコトヲ知レルトナリ

状 賀新年之文　片カナ八尺牘ヘ

春陽之淑花色媚体物紛紛

新トニ　鳳紀之慶

其比地淑家門多物

先知　貴一眷

淑淑四時勝景依淑春

健履正一旦

深為喜盛　戸中無

遠近依太平嬉遊林泉之上

恐惶謹言

恙渡青年寄賀一辞

余任遅一日不勝九頓

新兆鳳紀之慶 上 謹献椒花之頌 中 三元展首祝 中 陽春潮次至此 上 王春佳慶 中 歳序告新貴誉 上 有屬 中 六戚 健履正旦 中 動止佳祐亦逢春 上 清勝入新年 深為喜盛 上 不堪恢躍 ○ 至慶至喜戸中無恙 上 晒巻因舊 中 寒舎守常 上 私第幸無事渡青年 上 斗柄東建 中 轉和氣偶致一封 中 投魯封 中 致手啓

(上)虔捧半箋　寄賀辞(中)不勝相
祝(上)聊此由賀(上)為以祝壽之
誼　任運日(上)他日期春遊(中)須
約尋芳日　不勝九頓(中)臨楷快
々(上)呵硯皇恐(上)拝稽首(中)頓
首(中)不備(上)誠恐誠惶(上)死罪々
(状)新年之文返事　左漢文尺牘之
為年甫之祝詞
早辱誨章賀
三朝ヲ
杜氏巻之四　貞卜紹先仮
万寿更任命　記得
玉表清家門　恵山堅乗
貴府明庭　各圭建
謹涉時歳祈至存　恵山堅乗
多慶頻至　将像
永汤々附人　五瓶傳々
三春之行楽　謹此伏候
早辱(中)遠得賜書(上)伏兼(中)
恵札示(上)辱杜(上)已蒙　誨章
教示(中)来書(中)珍牘(中)家鴿
三朝(上)履端(中)淑節　任命(中)若
諭(上)業命　貴府(上)仙縣(上)錦里
(中)邦郷　門庭(中)邸第(上)清家(上)黄堂
或人の説に年始状の結語に期永日之時候あゝ期永陽之時候と世間普通に書来るも期永日候とぐらゝまて瀚之時の二字重言のアラムよりも侍るとそう尤さも有べきことゝ

(狀) 新年自作の詩哥を送る文

新春〻吉兆不可思議の体裁に今朝
甫歳上に休兆に朝来
えーしんしゅんぜんぜんきちちょうふかしぎのていさいにけさ
ほさいじょうにきゅうちょうにちらい
春枝始て発き梅花孫弟打栖
鶯花競ひ奸偶
ようかきそいかんぐうぐう
氣一変試竟仕ひて身弘無法
以投几下に
寄二鄙詞一

月は空を照して削不希に不々
拜乞に慈父に
甫歳(上)鳳暦(中)三春(中)陵吉兆(中)
令辰(上)嘉令に朝来今辰発起
鶯花(云云)黄鸝繞芳樹梅鶯映朝暉
偶強て時即偶然寄作賦
述鄙詞詞章一絶鄙語野詩
投呈汚奉告几下(上)閣
下(中)座右(中)顧恥拜(上)恭(上)
謹(中)敢(中)以慈父潤色斤
正請正不律不具草不宣不悉

(狀) 同返事

清祝羽〻玉章恭而受
朶雲麿嘉辞
仕い仍て花新鶯梅花
鶯花乗

詠長閑春交仕ひ
春光遅〻寄即
奥を佳唱を恵投に不拝
事の之詩章興趣
感賞之情不法納盃
不減古人暫留之干

中根氏之案上ニ

朶雲 尺素。尺書。辱命。無命

嘉辞 壽儀。祝詩。壽章 **鶯花**

云々 花開鶯囀 景悠然。黄鳥日暖

轉白梅風綻 辱被投。賜。寄

即事 即興。對景。任興。無感

興趣 風調 雅音 不減古人 不議

暫留 敢作家珍。拜置平座。納筐中

右手紙いろもも右ハ真字をつけてありこの真字ハ漢文尺牘乃内の文章とぬき出し書替又ハ異名あり上中下のあり敬ふ方同輩目下の書ぶあり係ー

□如此者ある事ハ敬ふ

ー見合ーて書ー

鮑宣ガ傳云 鷄ヲ畫テ戸上ニ貼リ符ヲサシハサメバ百鬼オフル其上ニ葦ノ索ヲカケルヘ故ニ葦索トモ云フナリ

仙木 桃符 桃板 桃梗 皆同シ

桃禾ヲクヾリ符ヲカキテコレヲ仙木ト云フ百鬼恐ルヘ所ナリ是ヲ元日ニ立テ邪氣ヲフセグナリ桃板ニ書法士民并ニ儒者僧家ヒヾて書べき文皆日本歳時記ニ委シクアリ

五辛盤 生菜 春盤

ナドヽモ又菜盤トモ云フ松栢椒花菜根芹等ノ生菜餅ナドヲ盤ニ盛リテ相贈リシヨリ云本草綱目ニ葱蒜蓼芥是ヲ盛饌ヲ五辛盤ト云フ迎新ノ儀ヲ取ル之

白頭 商人清湖君ニ女ヲ乞ヒ得タリ商人欲キモノ有テ求ハ此女ナ

ニ、ヨラズ典ヘズト云フコナレ依テ其名ヲ如願トヨブ常ニカクノ如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソク起キ出シヲ商人怒リテ追打レニ糞壤ノ中ヘニゲ入リテ其跡カタチナシ後人細縄ニ人形ヲカケテ糞ノ中ヘナゲイレ令如願ト云フヲナレケルトゾ

椒柏酒

椒澤椒觴ナド云フ椒ハ玉衡星ノ精ナリ是ヲ服スルヿ屠蘇酒ヲモチユルニヒトシ

神荼鬱壘

東海ノ度朔山ニ桃ノ樹アリ大キサ三千里東北ニ二神アリ神荼鬱壘トイフユノ神百鬼ヲクラフトナリコレニヨツテ此圖ヲ画キテ凶賊ヲフセコレ本朝鬼門ノ擾トスルニヤ

放生会

耶郭ヨリ歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ献スカザル二五米ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

五穀

漢ノ武帝ニ始ル天子五穀成熟ノ事ヲ天ニ祈ル

粉茘枝

米ノ粉ヲモツテ茘枝ノカタチヲツクリナリ

小豆粥

歳ノ始ニ松枝ヲ折ル男ハ七ツ女ハ二ツ食スルナリ

茶トシテ是ヲ呑ベシト薫勧テリ

鐘馗

唐ノ明皇ノ夢ニ小鬼来リテ明皇ノ玉笛ヲヌスム明皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ントスルニ忽チ一人終南山ノ進士鐘馗ト名乗リ以前ノ小鬼ヲトラヘテ食ヒ殺シケルト御覧アリテ明皇ノ御夢サメテ翌日御脳頓ニ愈タリ是ヨリシテ後鐘馗ノ像ヲ画キ又人鐘馗ノ兵ニナリテ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フトナリ此事唐ニモ久シク詞傳フレド正附會ノ説ナリ然シカ日本歳時記ニ論ズ見ルベシ正説ナリ

元日妙術

除年中病 歯を固く置 山椒を

今朝丑の時より前赤小豆七粒を右の酒にて呑べし年中病ふし

除邪氣 今日蓍木を焼び年中の邪氣を除く或い煎湯にして呑もよし

不老法 今日拘杞を湯に入てゆあみすれば人をして光澤あらしめ病を老ず

治腹氣 今日小便を以て腹氣を洗へもる有

瘟疫を辟く 麻の実七粒赤小豆七粒井の中へいるゝ病難を除く

樹木 今日鶏鳴の比火をとりてしして樹木と見るべし此時いまだ虫ゐず枝葉のあらまほしくする所あり是を取去るべし虫生ぜざる〻○又元旦五更の時早く斧を持て某の木を叩くべし或ひい切る斯のごとくすれば其年菓実を結ぶこと多し

○鶏鳴の〻ち松明に火をともし木の上下をてらせば虫ことごとくせば

元日寺社

京 祇園前樹の神事 元朝寅の一天をてらすの火をうけて松の木のけうりをふ新しく大服雑煮のこめを用ることうり 洛中洛外の家々ようちの火をうけて茶請の人おのゝ〻一説に大晦日の夜さく〻○般舟院元三大師りいるゝ非なり

画像開帳 ○六條道場天神自画の像開帳○仁和寺北野両所午王加持○比叡山東塔の修正會 但元日より四日まで 横川西塔八日迄なり

大坂 天王寺講堂秘密供 寅の刻○宝蔵の朝拝 辰の刻 太子堂の法事舞楽 巳の刻 金堂の万石米 酉の上刻 六時堂の重盞 酉の中刻 修正音楽 酉の中刻

初春之部

元日 日の定まりて元日ようちも上旬の季乃りの此はぎふ出を歳旦とくさをあるのなり

若餅 三ケ日の内又八初春ふつさるをもちをいとゝ談

小さき餅を若餅と云小さき字を忌故 雜法 出 元辰

(俳)あり嫁は姑ふるつきこぶり

△破魔弓 破魔矢 あるやとりてさまを射てたがひふ勝負をあらそふむりあり弓のまもびるべ〜弓は不祥とそふ物の神道そい彩物の中に用る哥あり白虎通ふ云く天子ぞうう弓を射て陽氣をたとけ万物ふ遠ることあり

(俳)あるや弓や高時紀うう四天王 其角

△羽子板 胡木の子とつてつきまゝ〜あひなり秋のそゝめ蜻蛉といふ虫は蚊を食ふものなりその形をまもて板ふのせつき上く出バおつる時蜻蛉のごとし〜と 世間問答ふ出うり

(詞)△ふり羽子 胡鬼の子 胡鬼板 洗米 (俳)羽子板や鈴引き鳴も羽子板のこと 外のやとふの潮照

△球打 壬打 神球打

△ふりぐ玉 ぬりぐ○毬打は厚さ板と玉の如くあり是をとりて遊ぶ子供のりてあをび物〜○唐土黄帝と云人蚩尤といふ人と亡めい外出尤の昊疫神とゐそて人民をなやませ〜故蚩尤が眼をとりて人民をなやつよなぞ〜年の初ふきちやうとうつうり〜〜〜や○本朝昔は年始ふ上つるふてもすもびるし〜故日本紀ふも出さり○万葉集ふ雜法 出うり

玉きりるとゐるぐきりるけとゐ

△ぶりぐ玉を打物〜毬杖とゐ 春盛

(俳)奉とゐふ新むとりるゐ沈水

△宝引 福引とも云 (俳)宝引ふ蝸牛九角とゐ其角

△年玉 早春ふ人ふ物をおろと云 (俳)奉 式之

△書初 試筆 吉書 暦ふ吉書 筆試 初とゐ日ゐ

元日ふもろ古例あり　王羲之の書
初の月義書ふあり　王羲之

日往月來元正首祚
きよ年のつさひ　てしもう月

太簇告辰微陽始布
正月のとしのいとり

蟄無不宜和神養素
めをしうさとりこと　こころもものどうこ

詩　書初　世間ふ書をれる

天筆和合祭地福皆圓滿
てんちうまがいてふくらく　えさううう

詩　長生殿裏春秋富不老門前日月遲
いいながもるあたをさこる　月日のうろてはんん

詩　佳辰令月歡無極萬歳千秋樂未央
よきはよさ日れいはこ　こうまもさこいぬと

詩　陽和入大厦。梅蕚出枝條
えさきくこうる　ひめのえをさこう

詩　梅自發南面。香猶到東簾
はのをきの　はうはなとう

詩　黃金自充牣。朱提忽納朝
わうこんはうまる　ぎんのうる

詩　海内太平日。扶桑安謐時
かいたいたいひ　ふさうあんひつとき

書初のうた

新古今　藤之

君が代の年の数をかぞへ
きみよとしかぞ

(俳)七福やかぞへあふい紙もゆる色友声
しちふくかぞあふかみいろとうせい

ゆづりをやにふくまて年始　其角
ゆりはにふくまてねんし

天筆を深て和合楽　重頼
てんひつふかわがうらく

(狂)八十の春を祝ひて　叢卿
はちじうはるいわ

いくよ世もよふ住の江やる松の
いくよよもよすみえ

年ふ八そ千代　去年今年
ねんはちせんだい　こねんこんねん

ちろもう紀ぬ
ちろもうきぬ

△夢の年△よひの年△ふる年
△ゆめとしよひとしふるとし

△千代ふ千歳△君が代
△ちよふちとせ△きみよ

右いづれも元日より年始の心を
みぎいづれもがんじつとねんしこころ

(俳)花ふ去年今年　秋色
はなこねんこんねん　しうしき

年の初ふ幼女乃
ねんはつをさなめの

頃ふ始まるるやあれど久
ころはじまるるやあれどひさ

さ世より童女のうてあを
さよよりわらはめのうてあを

び〜きく〜れて毬打
をうへる物なるべし

御降　元日より三ケ日迄の間の雨を

三ケ日

(俳)日ふ日こに彩とる
なる去や三ケ日無勝

松の内　正月十五日迄を松の内

五日まで八明ふかうあり
中人江戸七日ふかうとなる

七草の内　松の内ふ同

春永　永日永陽とも初の詞春八
日もなをくゆるやかなる心なり

(俳)春永としやいとやく
何のかざり縄親重

藏開　(俳)義
元おを

ものを猫の分
ている涼戸

湯殿始　歳初ふ沐浴すること

(俳)はる〜ゆどのの
のらくれ〜ゆめ井志

弓始め

正月七日八禁中ふ御弓の奏あり

(俳)去来人ハ教刑弓始め五習

弓始始め　諸多〜神代抄
日見始とあり○又

飛馬始といふる説用ひがたし○又
火水始是を正説ととべ〜深秘

(俳)ふ代万ふ
ひひめ〜免春可

馬乗初

(俳)ふり和ふ雪や
ふりてひらひ白可考

着衣始め

衣服を着そむる祝ひと三ケ日の
内ふ吉日を撰んで用ふと一説ふ

競始と書て舟ぐるかざり
の初る事とも舟乗初

各別ふあるべ前説を用ひ着
衣ぞめといふ〜用ひ　(俳)さそ

始老の鮫をも
のかうる去吉

暦開　暦を見し秘暦〜云

春駒　駒と頭さいてき舞し
禁中白馬節會ふ出る

(俳)春駒や寺ふ
ふやるとこ元伯兩

年禮

(俳)系くやいのまそ砂をまものに遠
年立やふ中の礼八屋

（狂）礼ふ者て市ゐ[illegible]
[illegible]

鳥追　蹈哥の遺風なり　参河より
数千町の田畝を持つ長者あ
て田園の鳥を追ふ法をめでゝ
ふてこの長者うゝふ養ひ〳〵者数
人あり[illegible]ふ[illegible]て長者の事を祝
して年の始ふ調ふる哥なり○世
んだよやまんざよの鳥追こゝのを
千町万町も鳥を追へべ〳〵こゝろ

御長者の御内へおとしするはさ[illegible]
右大臣左大臣関白殿の鳥追の高
官の人の鳥を
追ふ[illegible]
たもよせんでよ[illegible]　東西さ四千町ての田

（俳）[illegible]

（狂）[illegible]

大黒舞　家内の民の門ふ

（俳）[illegible]

調初　松枝子　松謡

（俳）[illegible]代の民や[illegible]

（狂）[illegible]

万春樂　春

鶯囀　梅が枝調ふ　青柳

訓ふ　是ハ皆催馬乗の訓ひ物の名
催馬乗禁中ゝゝひ物の是

乗初　輿乗　かご

舟乗初　船玉祭り

舟乗初ふ賽と二ッかゝりとく故
実ありその並べるや上へ一と二ッ
並ぶ一天日和よりやうふと祝
てゝゝり左をれば下へゝる方ハ六地
真直ふ也水上おゝやゝん
とゝ二と二ととを合す中荷多か
らんとゝ向ふへ三とゝゝぶさふた
ゝ前へ四とゝゝぶ仕合ゝと
祝ふ事ゝゝや（俳）[illegible]
[illegible]

節

朝節　外節　親戚宴會どもして
△節振舞と云ふ　がひよ往来するとふ
新春の賀節を祝ふ　元令節
毎よ祝ひ悦ぶ事年始のまた限ら
ずとへども正月ハ一年の始めなる
ゆへをもつて格別よ節といへ正月
の事とす祭りとゝへば葵祭り花と
いへば櫻の事とするグ如し

狂　粥　みどろ糸ようふ朝焼のめく
串ふもぬくろ春のふるまひ親友

節小袖　俳　粥もさらに正月き
ふもそぐる　正信

狂　ゆのことゝれを忍ぶ新
ふりも書にせずなし深井衣　正信

椀飯　東鑑よ云く今日千葉之
介これを沙汰すとあり

當月武家の節をいふなり

狂　節振舞ふ招く文　左り八漢文尺牘

[illegible]

紙の物語　年垂頂　行盃
了　彩鳥

[illegible]　佐殿ハ[illegible]
[illegible]　共　[illegible]

[illegible]　正年
[illegible]　之賦

[illegible]　光陰[illegible]
[illegible]　[illegible]

鍬初　俳　もとは和や又月
△鍬初　の風を[illegible]かゝす鬼周

水祝　水ヶ　去年新ふ要ひ
△祝ひ　男ハ水かゝる事と
これ水祿の比松永ヶ姪と讒臣ふ
めわゝせ[illegible]ようとする　俳
いも女房持ち兄　吹初
あいくひ其角　籟初　云

簫築簫　琴。琵琶。三
尺八箇の類　弾初　味線乃類

舞初。四辻家ふ楽初あり
△。正月十七日禁中ヲ

御舞初あり舞初ハ謡初ハ
あゝ舞楽のこと

△御慶　年始の祝ひの言葉
ありなんよろこぶこと

△履新慶　履ハ履ム
新しきを履むこと

事ハ履むこと
心もあり。年始の人を賀する詞

△歳氣　初春ハ立ツ一氣あり
年始の言葉あり

△歳旦句の祝　歳旦の字義ハ
のあらまほしけれ

つゝしもどよむべ　珊瑚代醉扁ハ出
く旦の字、日出一上といへる字

義也、歳旦の句ハ年始賀詞のこと
とよむべし。近年ハ正月中旬までの
氣の物と歳旦と心得るハ間違
あるべし。歳旦の句ハ手きゝ
のあり。忌詞多し少しにても
不吉の詞いはじ

上子日

△初子日　△子ハ日　遊ハ小松引
△子ハ日松ハ初子ハ日

の玉箒。○ひゝハ子の日野辺ハ出
て小松とひきあそぶ。ひゝハ子ハ方角
ハ北方ハ北州の千年の壽とかこ
とるべし。○松も千年の壽ある目出
度ものの故委と引べし小松ハ千
年の壽あるべしふ行末栄ゆ
る心とふくみ目出度りの故
なり。○玉箒の事ハ次ノ
委しくあるべし

○今日泰山府君の祭りの日なり　俊成

哥　新古今
さゝ波や志賀の浜松ねをふかし
誰が世までかひきそめし子ハ日なるらん

夫木　同

[illegible]

文治百首　定家

何[illegible]和子の[illegible]

[illegible]

夫木　兼待子日　寂蓮

[illegible]

家集　社頭子日　清輔

[illegible]

續古　雪中子日　土御門

[illegible]

人安百首　隆季

[illegible]

詞　引[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉箒　めぞうの草ふ松をとりそえて家とそ紀そむるとをいふ。俊成卿の口傳ふ田舎みかひといへとをるふ初春子の日箒に松をゆいそえてこうひとるを掃くといふ玉こいをくうる詞なり

蚕を飼ふ家の祝儀なり　子日衣　うすあを日ふ衣服と名づく

△梅の花衣　△鶯衣　△柳の衣　いろ衣

△鶯袖　うぐいすのこの衣の袖なり

若菜　△千代名州　いつみ

△磯若菜　いそぐはなり

△初若菜。七種若菜。十二種の若菜あり。七種のよりつぎふ若菜。昔子の日ふつこう中世より七日之誹詩ふ別して七日の夏ふよあり若菜といふ夏七日の外五十日ふ

貫之

哥古今

春日野の若菜摘みや白妙の袖ふるへのゆきの下草

さそ若もとそあるんやそ春こそハ
ふれつひべきをそちこちの山

夫木　雪中若菜　仲正

ふるくの若ふるとひとおるる若菜
世ふ乃雪いむ〳〵ふ春ふ〳〵

夫木　独摘若菜　仲正

独子ふ摘ふ春の野ふ〳〵若ふ摘ふ
紅ふ〳〵も人をさそいざうふ〳〵

御集　朝若菜　後京極摂政

独人ふのためとて去り〳〵ふ
的ふ摘ふ〳〵ふ若菜どそつむ

万葉　若菜　赤人

あをうい若菜つまんと志ふ野ふ
ふの山ふ〳〵と雪ふ〳〵

夫木　山家若菜　兼盛

あしびきの山ふ〳〵ふ
ふ人ふ〳〵ふ春ふ〳〵

千首　水辺若菜　同

あふのの春ふ〳〵ふ居ふ
つまぬ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

詞　つむ。摘ふ。下略○海辺砂の若菜つむ。渓菜つむ。野の若菜。

雪を分れば芹。此芹を摘べよつひ。
沢田芹。沢辺の芹。根芹つひ。
すぐ根芹。垣根芹。田の芹。畦の芹。
畦の芹。小田の芹。根芹。
芹の若菜。○氷　氷を割て若菜を摘。
みつる　七草の如人　袖　霞　野辺　白雪の袖　雨　萩の焼え
万代摘んつむ　摘初る若菜
右の歌は唐土の歌也　千の春の春は桃乃
連　七草をいざすこの若菜　周挂
着るがうけとなる　昌休
排　七草は唐土の歌也　宗頓　宗祇
六月八日中に七日の若菜　鬼貫
毛利やわらうかく　朝物　其角
いさたくの若菜　寥和
おりうくと雪つけてこいとる貴　来山
芹薺たくさ江を午房小　十磨
狂　ちはやふる　唐土の香ると　人安
日本の人乃ふるる　入安
若菜とよにさけつかくつ名に生そ
若菜をや摘て小くん　来吉

詩　若菜之詞

野外芝菜　世事推之蕙心
ヤクハイニ ノテサイラ　セイジ　オシレコヲケイ　レンニ
ノニイデ　ワカナツメハ　ノドカナルベシ
爐中和羹　俗人屬之纖指
コチウ　クハンアウモラ　ゾクジン　ゾクス　コレヲ　セン　シニ
イロリニテレウリスルハ手ノホソキ　女ノスルベシ
詩　七種詞七字對句　詩礎
七葉仙糞　兼月吐　万家春
シチヨウ　セン　メイ　ゾキテ　ゾキヲ　ケン　ゲツヲ　ハキ　バンカノ　ハル
メイチウノ葉ニイツ　毎日生ス
千株御柳拂炬開　春盤新
センチウノ　ギヨリウハ　ツテ　ヨツテ　ヒラク　シユンバンアラタ
禁中ニ植ル楊柳千本モアリ

詩七種詞五字對句　同上

官樹千花發　九重中禁啓
官中ノ梅樹　キンリノゴモンヒラク

階蓂七葉新　七日早春還
堯ノ代ノ莫竹　人日ヨリテ始メテ祝フ

△七種菜　延喜七年ヨリ始る上の子の日内藏寮内

膳司より禁中ふ奉るこゝろ或ハ十二種供ゝるもあり由公事根元ふ見へゝり唐土ゝそハ七種の菜羹と食ゝてよろづの病とのぞく

と荊楚歳時記よりあり然ゝ共何の草ゝいふ事と出さず本邦の七種も諸説まちゝくなり寛平年中の哥ふへゝり

うゝこゝゝゝ

病を除くと見へうし

京鞍馬多門天へ参詣多し

毎年の寅の日参る

ふこあろ〜

ふこあろ〜とは石を入て上り紐なしとて所々にてふこを入て上り紐なしとて上り紐なしとて上り紐なしとて

上 未日

邪氣を除く

廊の中とて〜せば邪鬼皆走り去る

祝詞 新禧休兆喜事日漸 新祉龍臻無労蓋蔡

占ひとて目出度事が知て有と云夏蔡は亀占と

二日 今日て 物日と云

二宮大饗食 二宮とは東宮中宮の御事なり

公卿以下二宮より參り て拜礼ありて饗ふつく

公事根源

朝

覲の行幸 是は天子年始のとぶきとして上皇并ふ母后の宮へ行幸なる事なり公事根源より出 朝覲の二字は礼記に有

臨時客 摂政関白の家は大臣以下の公卿を招きて遊びのみて定まる公務はあらざれど臨時の客と申す源氏物語はつんど客とあり御ゆふ

を用ひ給ひて郢曲の人も笏拍子かてうしふといつり(三)年中行事青合

(三)年中行事青合

(詞)神とうゝ祈ひまして居る。大夫人。はのそで。客のあそびあるを御ふ。

告朔 論語は朔を廃ふ告ふると そり毎月朔日百官の行事をまるして天子の殿に入るなり當月は政多きゆへ今日或は四日なども行ふなり

(三)年中行事

(俳)昔嵯の礼やひつの辛れ丑 臭

摩那切始 高橋大隅の兩家是と行ふ夜ふいろ

商初め 買初 賣初。家

三日四日なども有

(俳)夢うり 初つかは まりの福寿草 此君

京天狗酒

宴　六原愛宕寺門前の弦刺あつまりて祇園會社を定む堂中小太鼓あり　これをたたき螺と吹碁ささ〳〵さゆ〳〵天狗さゝりとて〇東西本願寺　松拍子　大坂　船玉祭

船持丹玉の神とまる　近江　嶌つるぎ　竹生嶌の神事　嶌八正月二日　よせをぐ神事ありて毎年くのごとし

三日　今日を猪日とす　不成就日〇今日

江戸御諷初　花松東北高砂　たう藥　千藤万病膏と銀器に入て天子に奉る　笹名指　水つけて御額并に御耳のうらに付ら〳〵とぞ延喜式に出たり　京　北野裏白の連歌〇比叡山横川西塔元三大師會　大坂　天滿石不動祭

四日　今日を年日とす〇開基の福沸　今日三月供る餅を菜等を加へて賛る〇福沸といへ祝詞〇餅の異名を福生果といふ故りの弼を福沸といふ也〇又七日に喰餅菜のかゆを福沸と云〇又香菜を浸て物を煮ると云者　弼々〇〇〇いるものの名を移し　周木

かぐら開　神前昊前かぐら其外家々なりくらべさゝ物に元日より餅を供ふると鏡餅をこしらへ今日七日十五日等に食せて喰ふ〇開〇〇〇〇支ありきとて〇〇〇〇忌詞故　弼今朝向に赤くのりの弐　光廣卿

白髮と吉　今日白髮とゆけば重て金　京　飛鳥井家の蹴鞠始

難波冷泉の両家皆同日　大坂　天王寺芹田坊の修正會

五日　今日を午日とす　ある人は農人禮を勤るなり

天氣　雨れば五穀に蚕ふかし　叙位　五日　六日

諸臣の年齢を奏し次第に位を叙する事なり 木造始

禁裏の行事 萬歳 五日禁裏へ来る千寿万歳

といふなり 一條院の御宇大江の定基三河守に任じて其民を

ついて佛教傳来の因縁をのべ舞しむ これをうぐめとこたふ

俳 和尚のうれこ蕎麦方桑こ水 親童

狂 万歳は祝ひをうたふべし 猿引

八百八十四文 やまと 不白 猿 是も今日禁中へ来

おの之 俳 猿引や猿の引らん猿搔 嗽石

漢の画像掛る 大坂 天王寺太子堂 生身供十四日まで 京 東福寺 五百羅

六日 今日を馬日と云へり 六日年越 七日八式日 今日をとそうや

京 高倉宮寺 方丈 鐵法 江戸 浅草寺 修正會

近江 山王三宮 七日 此日部小登り 遠く四方を禁

神事能 日

陰陽の気を鎮る事を得て年中の煩悩を除くの術也と萬華谷

といふ本ふ出ろう李充といふの詩 命駕 外西山寓目眺原嘯と

作るも ○七月を人日と云へ又霊辰

此事なり といふよろて霊辰と名つく ○三

七圖會ふハ暦と違ひ今日を往

亡日と寺出行を忌もれども頼朝

出陣と諸人往亡日なる紛りて

ろくひさうどこれもれて うを亡るを

とえうして軍利あり しとあり

天氣 風雨あるべ 災ひあり 白馬節

會 七日 白駒と見れば邪氣を

拂ふといふ 禁中ふて七日ふ白

馬出足引くく馬ハ陽の獣青ふ春

の色なり故ふ春の始ふ御覧ある

あり白きものい昔ざまて見ゆる物と
夫人あ〻馬節會しゝ人ふや

詞 百姓の産ゆ下ゆえ物ゆ。よりひ
のゞる。けをする。松葉を井
ひ若引つゝ糸。若菜。鴨 俳 白るを
引く夜いそゝも月えう邪 重勝

御弓奏 七日の節會ゆ兵部
省より奉る天竺の
多羅葉い其長さと尺五寸あるは
御弓もそれよりすぐりて七尺寸
ある由へこれを御らして申すゆう
○一説御執の奏しゝる心さもいう

御修法 紫震殿ゆて勤る七日
室ゆう修行。古昔ハ此所ゆ真言院
有て修を今い寺ゆ移ゆ人暫く南
殿ゆ行ひ

七日正月 本朝ゆ今日
なまゝ人 と五節ゆ乃
ひゝゝれ正月ハ少陽の月へ七ハ少陽の
数へ今日い少陽の日故
上い朝廷ゆり陽方民ゆ
とるゝと○若菜のあつ物と喰人て子の日
の遺風とゝれ〈七草若菜のいえ〉詩
哥連非ハ四十二丁目若菜の外ゆあり
〈七草〉といて昨晩若菜と板ゆの
せて日本の鳥と唐土の鳥と渡らハさ
ゆ七草ゆづなしいて囃をゝ鬼車とゝ鳥
鳥ゝ鳶人家ゆいゝハ人ゝ害をゝ八正月七日ゆ来
世ゝゝゝの心ゝ鬼車鳥の来ハ事又類聚ゆゝ此鳥とゝ
〈福口〉若菜の口を〈七草〉
口〈五名〉摘〈蘇〉高摘〈若菜摘〉右ゆ
ゝぐの類つむしゝ〈蘇の口名〉〈七草の口〉
ゝぐ杯のかい奥の草木の部を委

詩 人日詞 全

春度春歸無恨春 幾年もくも 今
朝方始覚成人 朔日ヨリ七日ハ六畜ニアテ今日始メテ
人日トス 従今克己 鵝猶及 今日ヨリ人ナミナランジ
願與梅花俱自新 梅ノ清キガ如ク心ヲ新メントゾ

○人日故事 金縷人 金糸を以テ人

形ヲ作リテ是新年舊キヲ
改メ新キニ從フノ意ヘコレニヨリテ
人日トスト 歳時記ニ出 貼人於帳 元日ヨリ六日マデ
八六畜ノ日ナレトモ今日ニ至テハ始
メテ人ノ日トナルニハ帳ニ人形ヲ
画テ貼ルナリ元日ニ雞ヲ 除病 新しき
画テ門戸ニ貼ト同意也
布の嚢ニ赤小豆ヲ盛ッテ井の
中ニ置キ三日めニ取出シ男ハ
七粒女ハ十四粒ツヽ呑ハ
今年中無病アリ 京 加茂の神事

京 嵯峨燈籠堂 大和 築瀬川の神事 祭礼
念佛始るまで

八日 今日ヨリ穀日ニ入
遠き出行をいむ 天氣 今日雨ふ
きハ十五日ハも雨ふる○月雲ふ来
るハ春雨多シ○夜參星月の
西ニあるハ洪水と記す
○今雨ふれハ水田ハ
太極殿ニて今日ヨリ十四日迄最勝
王経を講ぜらるて朝家と祈ッて奉り
申ス太極殿今ハなけれハ紫震殿ニ
て行ぜらるとし 年中行事哥合 神の
法の道どのへて社 若ハ八代を行ハ
ヲ々ん可世なるふいのるもの
いるの度の寿 初めの
みをうりい為家 真言院御修
法 今日ヨリ七日の間行ハる今年金
剛界ハ明年胎藏界ニ
後七日の御修
法とハ此事なり 大元帥の法
治部省ニて七日
これを行ハる 女叙位 女の位階と叙
ぜらるる事なり叙位ハ位と定ること
年中行事哥合
寿ふあるあ
ぬ
ぬ
ぬ

て女王ハ禄を賜ハ公事の時女王
禄の女ハ字をよゆゑと王禄と訓ぶ

京 空也堂鉢叩出初ハ 摂津 箕面丹天冨八日実刻

昨七日より 月毎ニ
叅詣多し 薬師 八日と十二
日を縁日とし諸方
ゝし叅詣あはし

九日 今日天氣晴るゝハ梅ゝ実のる 吉書叅 九日又ハ吉日
る大臣叅して諸国の守ハ釣と給ハ
て不勧の舎を開くべき由を奏す
る之俗ハ八ゝ 摂津 西宮民家今日炉と竈出ス居竈と云ハ
びゝき是なり

十日 天氣 月ハ暈あれハ春中旱を
係暈早くきあれハ旱せ
○午の三刻風をはらき
どる風をけまハ雨ふる 帳釘
帳書今日明日とりて商
帳ハ賣物買物を記し置く帳
面ととゝのゝ 俳 悔ゝ古吹
とゝのハ 夷祭 千日夷ゝ 俳 世々ハ
丙午 西宮・今宮代や名ハ
小判ハ春ハ亀音 狂 者ハの勢ハ
ゆゝ 常陸帶 常陸
貞柳 神事 常陸
鹿島明神の祭ハ日女の懸想人ハ
ゝあゝ時その男の文ゝ紙布の
帶ハりきあゝめて神前ハ置ハ其
内ゝ交ゝる帶を見て女のゝ
帶のゝハゝゝて其をび
ハゝの男と親ゝ 俳 ひゝら常
無名抄ハ見へゝう
ゝハぬ風も神ハ ゝ後 東恕

十二日 不成就日 鬼宿天吉 吉の字ハ六十二ハ今日を吉ハ
始吉の字ハ正月の

御具足鏡 具足鏡開 元日ハ具足ハ

煮とあつて喰ふし○江戸御殿中并ふ諸大名の屋形も同断かりそのかミい廿日ゑ大猷院殿君の御月忌るゝゆへ兼應壬辰の年より今日ふ

たゝ〻ゑ（俳）緋威の海　木冠

きもゝ〻ゝて神の玄

縣召

除目　今日より十三日まで三ヶ日行るゝゑアガタとい郡国と申

ゑゝ諸国の受領を召て官禄を玉

ゑゝ〻ゝ申少執筆の大臣参て御殿の廣庇ふて行ふゝゝ（三箇）年

中行事哥合やゝゑゝる君の甘さむるあ

ぐゝめゝめぐゝゝあへる名こそ少

ゆゑ　新中納言（俳）ゝゝけゝ鞍の

鞍あり　緑石楚山

事始　今日何事ふゝます

仕初る帳の表書

京　柳原の榊ふ神酒を供す

今日と廿一日毎月なゝ

るゝ

十二日

今日を花朝　天氣　今日日ふ暈あ

昼より晴き八月中雨ゐ○月ふかさあ

れハ飛虫の類多くゝ死と○今日

一日ひゝゝゝ百菓ゝく実のる

今日と十六日と雨ふ八年中雨多

解齊ゝ御粥　日の御座の大床ふて臺盤一脚と

立て供す御粥赤きかゝけふ和

布の御汁物をそへゝゝ三口食ふて

御箸とゝゝ

藥師　毎月今日を會

日ゝ参詣多ゝ

十三日

天氣　今日快晴ゐれハ

毎月十三日和よ

大坂　住吉御

結鎮ゝも云弓矢の大礼へ

神居白居三轉退治の時ゝ始

ゝる天下太平の御祈禱ゝ

南都　奥院

心経會

十四日

今日を俗ゝゝゝゝゝゝ

○かのへ子ゝ羊　天一天上

削花

柳の枝をゝゝけて門戸ふさゝ

柳ハ陽木ふて祝ひゝゝゝる

ぐふも用

踏歌　殿上地下の輩

る木ゝ

然るべき御殿

とめぐりて催馬楽をうゝふ舞ひ
かなでる事うり天元六年より始る
うゝふても唐の世ふ長安ふ踏歌
せしめ事潛確類書ふ出さう
我朝よい持統帝の時漢人来朝
して踏哥を奏も此時萬春楽を
舞よ今の万歳いこの余風なり
これを男踏哥といふ十四日の夜なり
女踏哥ハ十六日の夜なり あゝ花〜
のとよむあゝともいひ又踏哥
の節會ともいひ京中男
女れ声うなつく能うさうふ著
を先〜ほどへて年始の祝詞とを
うて舞を舞せるどせるを侍ひ
ゆへふ或時ハ和哥とうゝふ又詩
とうゝふゆめしもあり源氏物語
ふ竹川をどうゝふゝ出さう高巾
子ふ綿の花を作る是をうさ〜の
ものといふ又ものろこうふ朝士の文
さうめさうめうとゝ事文類聚ふ有
あで〜そなへハ十五日の夜なと云云

(詩) 年中行事哥合 貞世

そのゝ声さへをゝる雲井ふ
くぢのゝ月ふ
(能) とひやぬを祇代ふ踏哥宴其角

頭挿綿 綿の作り花を冠の額ふつけるをいふなり

(詩) 踏歌詞 唐 張説

花萼樓前雨露新長安城裏太
平人〻今夜イロ〻ノツメリモノアリ都人民皆太平ノ御代ニホフルヴ
龍街火樹千燈艶雞踏蓮花萬
樹春梅蓮ナトノ造リ花ノ燈篭
カザリニ竜ヤ雞ナドヲ見事
ニ造ルニキハシキ見物ナルヴ

御齊會内論議 南殿ふて御斉會
の結願を行ひ問者講師ゐゝく
御前ふて論議とれば内論議と

申す　十四日年越　縄引　縄引

いよ大づまと引合ひて勝負ふつかひて其年の吉凶をこゝに終事なり

土龍打　うごろと打て地をくつがへすこと

京　北野神前

午王かゝ持結願正月朔日より行ふ今日至行法終

江戸　谷中

感應寺の富突　大坂　生身供　天王寺五日より今日迄

十五日　今日七谷小小正月　天氣　八月十五日ふる

又雨ふる○天晴るゝ　測年之菓大小熟するそう

豐凶　今夕月此中する時一丈の竿をたてゝ月の影を測る七尺あれば大豐年六尺九豐年九尺一丈水を主とする三尺四尺五尺小旱

養生　今夕夫婦の交ちがへば寿命短し

三毬打　左義長　正月小打

とる毬打玉を真言院より神泉苑へ出してやきとる毬打玉は三角

みて天地人を表しやきとる陽をまろくす○今の世民間は正月のかさり松竹あるはの類をやく是をとんどといふ○唐は元日小祈とやく竹のやる音ふて陰氣をうひ妖邪のがいとのぞくこと本朝これをまねしたるか

爆竹　くちくとよむ。又竹とやく竹をくもよむ。故のこと今日やくこと

古書上る書初をやきて合

花びら　かこうしまとくとやく

三毬打　唐土の毛詩小貞德

かやの不祥と一同をんとりぬ十磨

狂歌　ほのぼのとそれいろ

はるけどんど賑ひふる貞柳

詩　爆竹詞　黎淳

自憐結束小身材一點芳心未

肯灰 アハレナルハ材木ナレドモ心ハ芳ハレテレバムサトヤカレヌブ 時節到来寒焔發萬人頭上一聲雷 時来リテ火ニカヽリテ松竹ノ鳴ル音雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒビクヽ

御薪 百官悉く薪ご奉アて宮内省おおさ公〳〵ゴとゃ

(令) 中行事 百官のりけをこのみ公ふ民のけゆりも旅ひみ〳〵り 家尹

赤小豆粥祝 紅調粥ハ粥柱ト云ハ小豆粥ヨリ始メテ祝ヽ

清少納言枕草紙ハ十五日ハ月いかゆのぜくまゐと書〳〵も此事なり

粥木 粥杖ト云〇昔ハ禁中ハ十五日ニハ杖の如き物をくだきたくむれ〳〵と 此杖ことうとれる女房い男子を生とゝう

平岡の御粥 河内国恩知平岡の神前ニて粥を煮田畠の吉凶と占ハ粥ト共云

上元 今日とゝ夜るを七月十五日と中元と十月十五日を下元〳〵〇唐ふハ今夕燈籠を多々とり〳〵甚ゆたつき事〳〵本朝中元の夜ゆと是と花燈々〳〵云

(詩) 上元ノ詞

大樹銀花合星橋鐵鎖開 燈炉ノカザリ善盡シ美盡シテ種種ノ花ヲカザリツクリモノアルヾ

暗塵隨馬去明月逐人来 人往来タヘズ賑ハシキ夜ニコソアレトナリ

遊妓皆穠李行歌盡落梅 タヾサヘアリク妓女ノ衣服皆美麗ナルガミチ〳〵落梅ノ曲ヲウタヒツメキアルクナリ

金吾不禁夜王漏莫相催 金吾ハ御門ヲ守ル官人今宵一夜ハ許ルシテ人ノ出入ヲ禁スルコトナシ王漏ハ禁中ノ水土圭ナリ今宵ハ土圭ヲヤメヨカシ

上元故事 唐土ニハ今夜ヲ元宵元夜ナドヽ云テ燈ヲ点シ賑ハレキヽ本朝中元ノ夜ノ如シ

百枝燈

唐ノ世ニ韓国夫人百枝燈ヲ燃セシ故事ハ天室遺事ニ見タリ

上元遊 唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス街衢ノ燈火白晝ノ如シ士女一人モ夜行セスト云フナク車馬路ニ塞カルト霊異小説ニ出タリ

傳柑 今日唐ノ世ニハ貴戚黄柑ヲ贈ルフアリコレヲ傳柑ト云フト

虹橋ヲ架 怪録ニ云ク唐ノ開元ノコロ正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何レノ所カ極メテ麗シカラント仙師答ヘテ廣陵ニ踰ルフアラジト帝ハタ何ンノ術有テコレヲ見ンヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アラハルヤガテ大真并ニ高力士黄香綽楽官数人ヲ従ヘ歩シテ橋ヲワタリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

花燈 唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモシ舎利ヲ拜ス也

○至道元年燈夕大宗御樓ヲ花燈是ニ比ス

(俳) 燈火ヲ舍利ハ多クトモシテ梅の花 杜吾

京 加茂左義長並ニ神事○差殺釈迦開帳○八幡厄神祭十五日

伊勢 〈獅子頭神事 山田度會郡〉獅子頭ニ神体ヲ入レ十四日ヨリ十七日迄祭

駿河 〈御穂祭 三保大明神是〉三穂津媛命ヲ祭ル十四日ヨリ十六日迄ナリ

十六日

養生 今日大酒ヒトムヒ又夫婦の交ヒヲ慎ム

天氣 今日西南の風ハ入門風トシテ豊年のもよふ東南の風もよし西北の風ハ旱トシテ晴天なれども旱ミ

女踏歌 十四日男踏哥の如シ京中ノ男女ハ哥ヒうたふを絶されて声よく哥ひうたふあるハ和年始の祝詞をつとめあるハ和

哥とうゝひ詩をうゝひ
絵のようたゝも有しゝゝ

走

百病 既ハ本篇博物筌に見へたり ○西京雑記ハ云く執金吾ハ宮中の者の夜行を禁ずる官へ今日勅して前後各一日 三日の間 禁をゆるべらるこれを放夜とゝ古昔と見る時ハ唐土ハも此事有しゝへとも

(俳)薮入やそれいるぞ[illegible]れ弟一尊

やぬ入や足ハ[illegible]

(狂)薮入ハ塞[illegible]

でゝ一二をあゝ

そゝて出る犬唐

京 永観堂大般若轉讀○

頼朝卿の世ハ始る ○加茂神事

○北山石不動参○千本焔魔堂参○大原野春日の冨○嵯峨焔魔堂六斎念佛

江戸 焔魔参 ○増上寺山門開キ

沢如十六羅漢を拝ぜし

大坂 天王寺射場の弓ゝめ○同所金堂大般若轉讀○住吉甘菜の御供 神の殿ハ御精進供ゝ外々ハ奥御供ゝ

明神々詠

ゝの間ゝれ歌のゝどまそも

ゝ社ハゝれ世とゝ

十六日

櫻 伊豫の国道後の左りの方山越村ゝゝ所の了恩寺山ハ有山ハ登ゝ左りの方れ林の中に有て毎年正月十六日ハ花咲くゆへハ名つくむゝ此山に花を愛する翁ゝ実ゝえのさゝゝあと老後ハ及んで春咲く花も心せよ吾よひハ旬ハあまれば此春花咲頃ハも逢ひゝゝとかゝられば花ゝゝ

ゝち咲ゝゝ時是正月十六日ゝり

それゝゝて年毎ハ正月十六日ハ花さくとゝり

十七日

天氣 今日と秋収の日ゝゝ晴天ゝれハ秋ハ至て五穀

正月一日令十月十八日　正月九

豊作也大雨あり秋洪水あり
曇る八秋作不宜　晴る八豊

京　禁裡伶人の舞御覧并に
鶴庖丁大隅高橋隔年ゝ
ゝしどけ
とめゝる

大坂　天王寺東照宮御
法楽○同所金堂

本尊秘法○江戸　上野御条詣紀大御製束ねて御条詣あるべ
御霊宮御弓

十八日　今日と落灯日とい八

養生　今日琴の事といむ

賭

弓　天子弓場殿ゝて弓を覧
あるゝ其員ゝゝ方ゝ罰
酒を賜ひ勝ゝゝ方ゝ舞楽を
奏す大ゝと近衛の官領ゝ事
ゝゝ大将射手ゝ饗を賜ふて
ゝをかゝるゝ

(三)　年中行事哥合　ゝみ人ゝ
持弓射ゝの歌ゝ
かゝりあゝゝゝ

(俳)　ゝゝゝ射ゝ紙弓や二人張　友静

京　禁裡の左義長○山崎宝寺
鬼○壬生六社大明神祭○

大坂　天王寺太子堂踏哥節會
○新清水寺観音供

十九日　不成就日

京　八幡厄神条　今日まて
参詣蘇民将来札守りと
天王ゝゝ指を得ゝゝ
災難をまぬゝゝ
ゝゝゝ厄神ゝ午頭天王
△吉田社清板　厄神と
と立神祇官夜支の刻ゝ修行ゝゝ

法然上人御忌　今日ゝ九五日迄
四ケの本寺ゝて執行ゝゝ

(俳)　人のせやりどゝゝ
風流むゝ法ゝゝ　ゝ　其角
ゝ　ゝ人　移竹

九日　秋収日

天氣　晴天ゝゝ百菓
熟す

女人鏡臺祝　皆ゝ祝ゝ事世日と初顔
と字音同ゝき故世日祝ゝと

習ふ女人の鏡臺に供へ餅と今日いそを喰ふ吏多り 今日

〇雪 正月こゝに京大坂杯にも今日鹽鮭の骨に大豆酒の肴と煮喰ふ

廿日團子 今日だんごを拾喰ふ也名づく○唐土江東しゝ取ふ今日紅の糸にて奠餞をつるぎ屋根の上にわたすことこれと天窮と名付るなり。拾遺記に見えたり 廿日にだんごをふもこれ

諸大名將軍東江戸 ふて上野參詣

下弦 **嚴島祭** 安藝の國。市杵嶋の神云地景の美を故名づく

廿一日 **天氣** 風雨と主る日之風あり雨あり若晴れば翌日風雨

内宴 仁寿殿にて行る文人に題を賜ふ詩を作て御前にて講ぜらるゝ(あ)年中行事音合

それをみやびのちらめるゝん

京 伊勢祭主柳原の榊に御酒を供ぜらる○本国寺。日朗法會

江戸 高輪毘沙門堂富突

廿二日 **京** 太泰聖德堂法事○大原野春日社祭 餘に西園寺形祭

大坂 天王寺太子堂月次の法事 音楽

東山善正寺歡迎の開帳

廿四日 **京** 川嶌祭 松尾の祭 月次愛宕參詣

江戸 増上寺上坐法問 諸大名御參詣○愛宕山參詣

廿五日 **養生** 今日房事とも天氣 月に暈有 樹に虫多

京 北野に法樂連歌毎月 **御忌** 法然上人御忌日 知恩院光明寺黒谷智恩寺 百万遍 浄花寺四ケの本寺に於て法事あり十九日より今日までなてけちぐゝん

京北野 江戸湯島 **大坂** 天滿 別て參詣多 **初天神**

廿六日 **京** 西西下津林神事能

廿七日 不成就日 京 ○泉涌寺舎利會 ○西の岡牛ケ瀬祭

廿八日 江戸 目黒不動參 大坂 北野石不動參

晦日 天氣 今日風雨あれハ米價貴し 京 清水參詣の連歌

白髮を除く 今日井華水を少し飲む事すくなし

月令 呑バ鬢髮白くなる事すくなし

邱部ハ八日の定まりなり正月の事ともの。初春の月の事ともの。初春の次ハ出を

外記政始 尤吉日を撰ぶべし 外記ハ恒例臨時の政事を執行ふ官なるゆへ正月ハ

まづ當年の政を行ひ始る義なり

店卸 帳祝ひ同一類 ㊟一年のムさぐさやハ概ねこ風琴

傀儡師 傀儡いくぐつとよむ 驛舎の留女の遊女

とうゝたる形ぐつといふ人形をまわして其ぐつの留女の身ぶりとうゝせーゆ傀儡師といふ西の宮淡路ゟ多くくる

るゝ又でこくもいふ

詞 ちそまハー 山猫つくり 去だの師

㊟ 箱ふ祢て意せぬ猫や傀儡師 汶上

夷廻 傀儡師の類ふて初春ふ夷の姿をまゝひ目出度こと奏

初芝居 昔ハ芝の上ふて見物し故去ぐるゝ名づく

一説ふハ右店卸 傀儡師 初芝居乃類歳旦ふ次ぐものゝ可考へ

三節 正月元日 七日 十五日 右を三節といふ

歳旦開 宗匠家ふ正月吉日を名ゝ門人ゝ

ゝみきゝゝる歳旦の句をあつめ席をひゝへて句の次第を定む

正五九月説 本邦專此三月慶賀の事を

或ハ親族相識宴會とする唐ふてハ此三月官ふ登らむ萬の事にも用ひそし五雜組ふ見えたり清波雜志ふ曰く佛法ふ此三月と清素月く名附て殺生とかくるなに

正月衣服

上つくふめ衣服ふかごうて定む

櫻衣 表白うく裏もほう色 **柳衣** 表しろ裏あい色

上つくふハ正月右のいろをもつて正月の氣ふ應ずる色く

當月綿入を着るとして正月袴ハ柳色ゑり是元素袍の製に準じ

女衣服 上着地黒間着地紅下着ハ白むくいうえう浅黄の小袖と着かさひて間着上着皆ゆうと裏ゆきるも

初春の莊いろのひしうちけまハ松竹の繻と縫はもべく

時令

此部ふハ初春の時候ふかゝる事と出さ

初春 春立日より三五日のあいだを初春と早春と同心く

連 梅や咲花のおもをうん子代の春

俳 鶯や柳の糸の初すゑや当れとさ初春日 忠房

初春や衣まきらの日のうらくと晴て久るれ 曉臺

兼久百首

万葉詠鳥

あるべきまつ見めしに我門の柳のうれよりぶひとふさろ 家隆

建保百首

雪もとけまよいあへぬみうしの玉松がえみ初春霞 為家

續古今

濃みどり春の衣の初春霞 草庵

まさとふくるとけさいえうん 頓阿

霞の去ひて春どりのうれ竹ふ
一ち明き立ち春やうぐひらん

柏玉　初春海　道遥院

波風紙さゝぬづめて四つの海の
我ちゝ祝なるまゝ春やたらうん

詞　霞　霞ゝ。のとけさみどり。
日　霞む。長閑。霞ゝ。春ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。雨ゝ。ゝ。ゝ。

春木。風のどうる。春の初風。星
ゝ。ゝ。ゝ。花ゝ。

くゝ。ゝ。煙　民の。ゝ。ゝ。ゝ

りろ人。神代つゝ孫て行くゝ人の心
はのくうる。佐穂姫梅柳の扉袋
ぶ。ゝて後ゆくうふ春い来ぶう
都ゝやこの春。九重ぬ。花の都の
初春。垣かきれの春のまりえ秋。雪
まに月ゆゝ。久ゝと天の岩戸。天
のき。雲井。この春の梁の沿ゝ。ろ
ゝ。ゝも初春。

(注) 山伏のおひをゝ。めゝ。宵くゝ時い
門出もゝ。紅けゝ。ゝ。信徳

○初春早春の題ふ立春の哥よ
みゝるゝ。ゝ。ゝも立春の
題ふ初春の哥い詠ゝ。立春の
とゝい春の節一日よ。ゝ。

早春

(哥) 万葉

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ柳
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

拾玉　雪中早春　慈鎮

ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

物外山川近　風光新柳報
春初景色新　宴賞百花催

詩　早春ノ作　暢諸

献歳春猶淺　年華日数程アラス　園林未盡開　百花ヲ催スレドモ　雪和ハ開サルヘ
新雨落風帯舊寒　雪ハ雨ニトケタレトモ　寒来　風ハ未タ余寒ニサヘ来ルノ　聴鳥聞鴈看花識早梅　飯雁早梅ニテ春ストレルバカリナリ　生涯知幾日更被一年催　イツマデカアラザルベキ世ニ一年ノ老衰ヲモヨフスナリ

餘寒　春ホ[illegible]

俳　[illegible]

沙汰[illegible]

宝治百首　入道太政大臣

[illegible]

貞應百首　為家

[illegible]

柏玉　餘寒雪　後柏原院

[illegible]

玉吟　溪餘寒　家隆

[illegible]

千載　餘寒月　為尹

[illegible]

詞　春[illegible]

[illegible]

[illegible]

(詩) 餘寒五字對句　同上

雪霽梅先發　山河雖度臘

春寒柳暗催　雨雪未知春

(詩) 餘寒七字對句　詩礎

澗道餘寒歷氷雪　門不關

石門斜日到林丘　何報春

難所路ヲヨギテ日カタブク

疲馬山中愁日晩　旨余寒

孤舟江上畏春寒　春風寒

(詩) 余寒ノ詞　張起

再閣餘寒在新年舊

燕歸婦人部家ニイマダ余寒ツヨク春ノケシキナケレドモ二月ノチカバニ至レバ燕ノ飛ビキタルコロニナレリ

梅花猶帶雪未得試春

衣　春半ニ至レトモ雪イマタ消ヘズ冬ノカサ子ギノマヽニテイマダ春ノ衣服ヲキテモ見ヌ也

(状) 餘寒之文　左リの真字ハ濃文尺牘ヘ

[illegible]

項日　倍ヌ　春寒ノ

[illegible]

起居　如何

衆作試稿 山々之千嶺ノ

雲来不法 一ノ毫毫

積雪 須ニ 弄 翫

玄遠 衆仕ル 弥

麗 藻ノ

吟々々々々々 ル ル

新賦 諧フ示ニ

改年春ハ

初春ニ

尺牘 穢華ヒ 書簡と記を

頃日 (上)多日 (中)暦春猶寒 (中)新歳

(中)数日 (中)春寒未知候 (中)花遅賞菜

語 起居 (上)貴體盛壮 (中)平安

(下)無事 (下)無恙否 千嶺ノ

積雪 (上)山頭白雪 (上)窓前雪景

(中)雪満霞外 (下)残雪皎々 弄翫

(上)想像 (中)遐想 (下)眷々 (上)廉藻新賦

(上)新詩詭剣

請示 (上)鄭示 (上)曲許 (中)野生

(中)請惠 (中)授擲 不佞 (中)小子

(状) 餘寒之文返事 (尤ハ漢文尺牘ニ)

如今年今春 若諭雨雪 未散 雪 和氣

存望中有詩料而

耶 恥無著述 他日 孤人行程

得暖 徘徊焉

尺牘　書簡並上中下ノ記

若論　(上)蒙無命　(中)教示　(下)羨告

雨雪天散　(上)凍雲　(中)餘寒　(上)霙晴　(上)水雪　(中)餘寒長在

遂　(中)山中深山

閑寂　(上)寂寞　(中)閑事

詩人　(中)古人　(上)古調

幽林　(上)幽

感興　(上)吟趣　(中)興　(中)詩情

無著述　(上)天才嗤　(中)倉荆棘

他日　(上)異日　(上)喻日　(中)向来　(中)逐節

詩料　(上)詩料　(中)有見前

得暖　(上)假晴　(中)期春光

往問　(上)叩謝　(中)問尋　(下)往訪

○年内とそも立春の節ようのちハ餘寒くもくべ〜正月元日をぎりも立春の節より前なべ餘寒しもくべ。今春寒氣つよくあぐくもくべ〜

○二月ちうもひゆれば餘寒くもくべ〜の能諸い餘月の季なり哥ハ春なり

春雪　△あと雪　△ある雪　△残る雪　春雪と同一事なれども哥ハ多くよりなり

拾遺　柿本人麿

梅のはなれもこそどひさうこのあまぎる雪のなべてふまてば

散木　山家春雪　俊頼

山ざとはいつもわるる雪のいりしらこそゆるぞ思のちぐめすくる

万葉

今さらに雪ふるめやもくれなゐのうめの花ちりまがふまで

建保百首　春雪　定家

深雪の今もなりしくるる山おのの木こえてやさぶらへさ

新古今　二月雪落花　康資母

梅ちる風もこそやふつゝん

とまる雪の袖にぞくる

新拾遺　野春雪　覚誉

なほ色なきなごりの冬の花なれとこゝろ残る雪のあはれ

詞　潜雪　春の雪とうてのあれどなるめすく　義茶屋

のこりなく　ふるかとこそ　つゆ　ぬきとりて　はらぶる　ふる日　ものの　小ぬぐ　うなり
ふる　若草　宮ぬ　ぬ　ぬ　

前参議敎長

(旁) 新古今
ひかり和らぐ春の日の
そこ〳〵ぬれのへの雪の
草庵水ぬるゝ花と見よ
らん庭に消ぬる雪頻阿

(詞) 雪ふる雪げ消ぬ。雪消。雪の
ふる。雪とくる。のこる雪
(俳) 雪ぬるゝ寺と聚落冬ゝ乾

(狂) 男ひとりて月見しるさるゝ
こやくれなる雪女の郎　貞徳

(詩) 雪解五字對句
送寒餘雪盡　同上
迎歲早梅新

(詩) 雪解七字對句
湘潭雲盡暮山出　詩礎
巴蜀雪消春水來

碧洲盡清流
寒雪多秀水
水亂流
山更春

雪頽附

雪の山より崩るゝ
乃あは山の麓と通らば高根の正二月の比雪
山下の様子と尋ね合せ油断
く通るべしゝ雪とけとゝ
根の雪解上よい雪ゝ山
の脆崖より解落る雪水ゝ
ひ山の肌と雪ゝ切ゝる
時ハ裾へ落ゝ冬ゝ積
たる雪ゝれバ磐石の如くゝ
それふゝ死ゝる事多ゝ雪
ゝれくゝ目の間に落ゝ
北陸越後ゝハ越前近江の
境ふ甚ゝ雪国高山
の所ゝてハ心
得て歩行ゝ

春氷

春ふゝり
氷りゝると云

又春風ゝ行く心ゝもよゝり
藤原秀能

(旁) 新古今
夕月夜波ゝ
芦ゝ

詞 石にてとる小川、為氷。さゝ波。水の白玉。おりけり。春風。弱かさの氷

詩 春水七字對句

詩礎

引水忽驚氷滿澗 水重文

回田空見石和雲 引溪長

殘氷 春ふるとけつくさゞる氷 とゝの御傘と云書ふ 氷蓮 氷冬くもり

氷解 氷るゞく〻氷のひま

歌 建仁哥合 家隆

氷とく春の山風ふれぬしし 岩根とゝむるたゝのあるこゝ

詞 氷るゞく。めてとゝ。こゝろの ひま。和くる。なゝ。岩角。春風。池 羽日けふる。初次ある。河ある。 風にゆく。岸。とゝ。ゆゝ。もむる

俳 氷とくて彼岸や思ふ沈菜

連 氷とく波の名残くゝ 昌休

詩 氷解五字對句 同上

鳥飛林覺曙 風兼殘雪起

魚躍水知春 河帶斷氷流

詩礎

詩 氷解七字對句

三代樂回風入律 水初緑

四溟歌駐水成文 水知春

詩 氷解ノ詞 儲光義

洛水春氷開洛城春樹緑春ノ陽ノ好景色 朝香大道上落

樹林モ緑ナル洛 氷トケ

花乱馬足落花ヲ踏ニ 馬蹄ニ 遊行スル

山笑 初春の山の姿 春の山は草木 ゆるぎ

りゝくとうゝぐ〻 云ふ

しゝとしいふ〻ろ〻

詩 春山淡冶如笑 こゝろの

山ハ草木ハ志げ流ロ方ハ今ハ山の姿も志ル笑ふやうなる物と云ふ

日待月待

廿三夜 廿六夜毎月此事とする人も都と別て此月祭ることなり事なり天地月日を祭ることハ都て天子のまつりせぬ事ハ僭越の罪甚し〻天子ハ天地を

まつり諸矣ハ社稷を祭り大夫ハ五祀を祭ること庶士庶人ハ敬て恐るべき事〻非礼の祭りをなす人ハ福なくして禍あり若報の礼を志ざひ祭らんと欲する人ハ沐浴齋戒して朔日又朝日をまつ〻十五日月を拜ぜハ理ふかいそ害なるべし供物等用ゆる事かなれ江戸にてハ廿三日廿六日高輪 鉄炮洲 そ諸人群集して月を拜ぶ是俗人ハ是非なり君子是を不習

草木

正月草木 又くも其内ハ三月の事なれ

松の花

異名 黄花 若花 若松

〈みどり立右いとまも春あり若ちりに黄なるものあり是ど松の花〉〇一説ハ松の花ハ百年に一度さく日出度ものなり

連 雲ハ花を祭にうゆ松乃色

俳 翠の岩の姫松ぞさすよ 貞實

狂 常緑なる松のみどりも春ハ今一しほの葉ハ松あらしの 正継

哥 草庵

君住ん山の山もまつる高なれと

ものそ山の花をまつらん

頓阿

新拾 春松久緑

雅家

緑ハ代とみどりとそ人て根生乃

松と君とのゆくすえ清乃ちよ

新古 松有春色

太政大臣

そ〻るへて春ハ若の緑みどり

松ハ千ぞの代乃色ハ千ハ乃れる

山ハ草木ももえ出ぬ口ゝ[illegible]七山の姿もそこに笑ふやうなる物と云ふ

日待月待

廿三夜廿六夜毎月此事をなす人も有

と別て此月祭ることなり事ゆゑ天地月日を祭るゆゑハ都て天子のなすせぬ事なく常人の祭ハ僭踰の罪甚し　天子ハ天地を[illegible]ゆゑ諸侯ハ社稷を祭り大夫ハ五祀を祭るゆゑ士庶人も敬て恐るべき事ゝ非礼の祭りをなす人ハ福なくして禍あり若都邦の礼を[illegible]ひ祭らんと欲する人ハ沐浴齋戒して朔日ゟ朝日をまつ　十五日ゟ月を拜せハ理ふかくそ害なるべし　供物等用ゆる事なし江戸にてハ廿三日廿六日高輪　鉄炮洲ゟ諸人群集して月を拜ゟ是俗人ハ是非なし　君子是ゟ[illegible]

草木

正月草木類　二月の事ゟ其内ゟ[illegible]

松の花

異名　黄花　若翠　若松

〈みどり立右ゟ[illegible]ゟ春ゟ[illegible]ゟ黄ゟるものあり是ゟ松の花ゟ〇一説ゟ松の花ハ百年ゟ一度ゟく日出度りのゟもゝ

連　雲汀花を祭に[illegible]ぬ松乃色[illegible]

俳　翠[illegible]の姫松ゟ[illegible]ゟ[illegible]

狂　常緑ゟる松のみどりも春ゟへ今一ゟの巣ゟ[illegible]ゟ　正継

哥　草庵

君住ゟ[illegible]ゟ高なれゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟん　頓阿

新拾　春松久緑　雅家

千ゟ代ゟみどりゟそゟへて相生乃松ゟ君ゟのゆくゟ[illegible]ゟ清ゟ[illegible]

新古　松有春色　太政大臣

ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

正吟　松色深春　家隆

万代も緑にとみちわかの浦の松の色はいつの間にか

同　春松契齢　後鳥羽院

あくるのむ神路の山の松の葉の

我君の長き齢をかけそへて

新續古　庭松春久　左大臣

庭の面ふかき色をそなへつゝ

春ゝ来ぬ色にそなへんとて

姚合

詩　採松葉

擬服松華無所学嵩陽道士

忽相教松実服食ヲ誰ニ学ハント案ズ

ルニ山中ニスム道士ニアラズ出アヒ其ノ

法ヲ思ヒヨラスニナビウラミリ

今朝試上高枝採不覚傾翻仙

鶴巣朝先試ニナラフタルトホリ高キ

枝ノ上ニノボリ採ラントセレニオモヒ

カケズ鶴ノ巣ノアル

ヲヒックリ　カヘセレトモ

如龍　松ノ木ノ皮ノ中ニ脂アリテ

狀龍ノ如シトイヘリ抱朴子ニアリ

化石　六帖ニ云ク回紇ノ拔河

ニ古ハ康干ト六ノ川アリ松ヲ斬テ川ニ投入レテ三年ニ

ナレハ化シテ石トナル世ニ康干石ト云

○承朝三物ノ内ニ　十八公　長ノ千圃夢ニ腹上ニ

公石ト云所アリ　松字ヲ

別レハ十八公ナレバ後十八年ニシテ

官位三公ニ登ラント云フ果シテ其

詞ノ如シ　封大夫　秦ノ始皇泰山ニ

テ暴雨ニ逢ヒ玉

ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ

因テ其松ヲ封ジテ五大夫トス

靈岩寺　唐ノ玄奘西域ニ往

時灵岩寺ノ松樹ヲ

ナデ、曰ク吾西ニ去テ佛經ヲ求ル

本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長ズベシ

ト云ヲキテ去リケル後此松西ニ指ス一

年忽チ其枝東ニ向フ弟子等三

テ吾師帰リ来ルベシトテ

迎ヘ待ケル泉ノ玄幷丸九丈

松品類

黒松 雄松ともいへり葉細く柱に常の松なり

赤松 此松ともいへり葉細く柱等に用て補しなどかつて

朝鮮松 本唐松のごと葉長く色をなして実と松子とのごとし

五葉の松 葉あをくみどりかゝり色あかし

姫小松 五葉に似て葉かをし

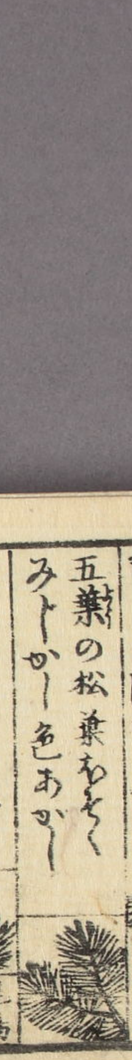
つまり禾もちさく枝じて各別のものゝ多く立花に用ゆ

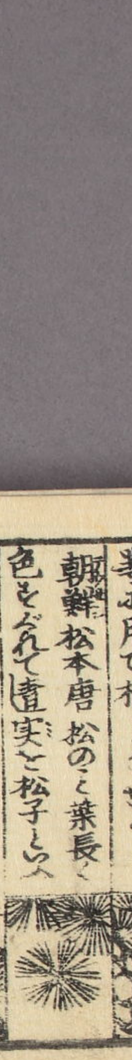
駿州富士の辺に多くあり故に富士松ともいへり葉多く花と短く青し春の葉出てゝ冬に落葉を此松は四季に色をかへず春の出葉は青く見事なり

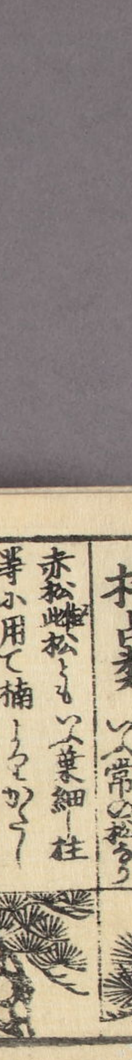
夏にあらず秋黄に色つゝ得もいはんかたなし冬にいたりて落葉して雪の降るとても枝にたもつ事なくしてむし

唐松

鹿嶋松葉







梅

○昔は本朝花と称せしかの櫻をかの梅の種類

白梅 つぼのゝ

江梅 花白し 野梅 江梅に同じ 大梅 大花

行幸梅 花大きくして 鏡梅 花中ゝ紅 いろ白し

豊後梅 うす紅大 軒端梅 花中ゝ深赤 枝の如し

鶯宿梅 八重も一重も有り故事あり 右故事の梅の種ごとく物

飛梅 難波梅 梅白八重中ゝ数変あるべし

梅異名 氷姿 氷肌 玉瑞 瓊枝 玉肌 玉潤 逸民 雪魂 清容 木母 花魁 三凝紫 花儒者 好文木 故事 綸旨梅 香敷 見草 此花 春告草 白州

連句 往来 彼で宵乃梅 宗祇

春風のそゝ梅咲白ひろる 紹巴

染れ来の落るもよしや梅のむ 全

俳 周甫 枝も匂や梅の茎 ト空

梅一輪一つゝ程のあたゝかさ 嵐雪

梅ちるの答ゝ〻いとやうる 元政

ふるつゝき枝のさけめや梅のむ 其角

梅きくあさごけ茎の白ひろる 全

平塩の梅小そでけふ咲くの色 慶賀
行くかたてれい紅の梅移竹
三味線も小唐もの後梅花 来山

(寄) 万葉

春されば まづ咲く宿の梅の花
ひとりだにてや春日をくらん　坂上郎女

夫木

とりてこん彩の梅はなれるみか
落くやうなを春の一えさ　為相卿

万葉

みそのうめのきの梅の花むすぶ
あめのふるいあうり君こふりえん　家持

家集

梅ぐをしみ山ところふ咲くさ色て
入こむ人よし色よくる風　西行

建保百首

梅ぐいやたうつるもこ彩さこそ
春の一まいの花のかぐ見よ　定家

新撰六帖　紅梅　信実

春の梅はうつるみのおろし梅
紅をまりのこのやうれるん

金葉　残梅　為道

そはくもいくのこそ梅のむ
そはくもいくのこそ梅のむ

夫木　春朝梅　家隆

結ぶるあさひの里の梅ぬいる
やそうじ人も社白よら森

新勅　夜梅　前実白

梅が香もあまるの月ふまぐつ
それくもの人とうぐむこころる

夫木　夕梅　為兼

暁の風をまちうぐて春の花
このゆふぐ和けをあるる

家集　山辺梅　仲正

よのつもれつるまいこ去ふの
梅の匂ひをたきりのふせん

家集　垣根梅　仲正

匂ふる色は燃をこ彩をこ
垣根の梅のこうるうり

夫木　家梅始聞　能因

去年かいもあるふいつーかく
うぐ花雪の春これ春の

玉吟　暁梅　　家隆

春のよのおぼろ月夜の梅ばかり　霞も中ゝて匂ひ出そゝ

夫木　道梅　　法印定覚

ゆのゝ乃ゝ行屋ふのう咲れくる　たちくるぐうう玄風をゝく

白川　梅移水　　顕輔

笑日ゝう　むのゝぐくくゝゆゝ　梅のゝたゆく意の中り水

家集　湖辺梅　　定家

ゝゝゝ志賀はなまの行里を　雪さそふゝ邦　のゝゝゝ

玉葉　月前梅　　宗尊親王

梅ゝ香ハ乃ゝゝの春なごりふて　若乃たゝくくゝもむ月ゆげ

新続古延歌　海辺梅　　有親

ゝゝ人のゝゝゝ　那波乃玄岩梅のゝたゝ芳

夫木　野外梅　　光俊

志ゝゝ人のゝ杭ゝ世　ねての郷ゝゝ梅ゝゝ

詞　ゝれゝ弁。ゝゝゝ。咲らゝ。旬ゝ。野ゝ。ゝゝ。一ゝ。八ゝ。ゝゝ。ゝゝ。所ゝ。谷園。地。ゝゝ。路ゝ。ゝゝ。

きの梅。花のゝゝゝ。作家の垣垣梅。軒。彩閣の梅。彩

の梅ゝゝ。窓ゝの梅ゝゝ。ゝゝゝ。南ゝ花垣垣板の梅。鶯ゝゝ。ゝ

て稀ゝゝ。雨風ゝ旬ゝ。稀ゝく。ゝの　めゝゝゝ。梅ゝ花ゝ。ゝゝ。柳枝ゝ

を春風旬ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。月旬ゝ。ゝ。

ゝれゝゝ。旬ゝ。樹。新ゝゝ。ゝ。

ゝる新。日。新日新旬ゝ。彩閣の梅。雪

ゝゝ。旬ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。雪ゝ。

咲。夜ゝゝ。旬ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝの梅。旬ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ぬ旬ゝ。ゝ。梅ゝ香ゝゝ。ゝ。ゝ。

ゝゝゝ。賤ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

雪ハ冬春ノ交リ梅ノ花ハ春ノ初メ雪ハ梅ノ花ニ
雪トケテ春ノ来ルト云フ。雨ハ梅ノ花ニ
雨トケテ春ノ来ルト云フ。

詩 梅ノ詞 張籍

自愛新梅好行尋一徑斜
梅ノ花ザカリヲシタヒ往来シ心ニカケテ
小路ヲ横斜ニマカリこチヲタヅネルく
不激人掃石恐損落来風 側路

ノ石ヲハラフテヲカズハ風ニ落花
シタル英ヲフミワンゼンモノヲトナリ

詩 梅ノ詞 唐 彦謙

欲寫愁腸愧不才愁ノコロ一パイ
ラウツレノベント
思ヘトモ身不肖多情練瀧已低
サイナルヲハツル
催云ヒノベタキコトハカヅく アリテ已ニ詞
ニイヒイダサントモヨウストナリ
窮郊二月初離別故郷ヲバ二月
比ニ別レテモ
サビシクナツカレキトナリ 獨倚寒村鵑野梅
フニトリ村上ニアル野梅ノ花ヲ
鶯ノ香ヲカイデ君ヲ思フナリ

詩 梅花七字對句 詩礎

押條啼色不忍見無數梅
リヲテウモアシテイヨ スヒニコルニ ムスウノ
ヤナギイロツク タズスキ
梅花滿枝空斷腸點人衣
ハイクハミチテエダニムなシクシテヲ テンスモノコロモニ
ムメサキミダレ チリカカル
寒澗渡頭芳艸色弄綺梅
カンカントダウハウサウイロ モテアフラキハイヲ
タニカハノワタレハ チヤウアイスル

春梅山領上鵰鴂聲正調梅
シユバイレイシヤウシヤコノコエ アイシラフ
ムメノヤマキクハ山ノウヘ

詩 梅花五字對句 同上

梅花交近野
ハイクハマジハルキンヤニ サキミダレ
草色向平地
サウシヨクムカフヘイチニ ハヒロガル
春明發筆光
ハルアキニカニハツスタミフハフ

梅故事 羅浮夢

浮山の松間ニ酒肆あるまりて淡粧素
服セる美女と語ル若き香人を襲ると
うちつれ酒肆を叩ちて共ニ酒を呑
醉臥して朝ハ起あがり見まバ梅樹

隋の趙師雄
日暮て羅

の下にありて酒肆も美人もうゝ〳〵

梅暦 山中 丸住居

て春の至るとちぐ〳〵梅花のゑゝを見て春をしることあるを梅花暦と云

詩話 蘇東坡が妹好んで詩を作ること東坡にまされり

山谷東坡に會して詩を作る時東坡 和風搖細柳澹月映梅花と作る妹の云く未可ゐ〳〵と大ゐに笑ふ山谷是を見て唱へて

詩 和風舞細柳澹月隱梅花と作る妹見て必ず可〳〵

又東坡山谷の兩人妹をむかへ汝が句いかゞと問ふ妹詩を即時に作る

詩 和風扶細柳澹月失梅花と作りしかば二人も大ゐに感ぜりとぞ

好文木 晉の哀帝書をよむ時ゐ四時をもて梅の花開さくたりとゝろ故ゐ好文木と異名す

○梅譜ゐ梅に花の備者くとゝろ

節分草 花は白花にて一莖ゐ一葉を出し立春の頃さくゆへ故節分草とゝなづく咲く寒中より分十二月の季ゆへ是も名ゝ十二月〳〵とゝるは所業ゐ

土筆 生を形筆乃如高三寸

福壽州 元日ゐ花さくゆへ元日草ともゐゝ

詞 春の州ゐの。

俳 佐保姫の多ひ袖や紙ゐ衣風斯

福ゐ多たゝゐ月多移さ〳〵

狂 咲かゝる梅に美釈の巧ゐ

福ゐ多さゝ〳〵咲ゐけしゐ米都

詩 福壽州五字對句 同上

淑氣煙相喜 瑞凝三秀州

風光草尚榮 春入万季秋

詩 福寿草七字對句　詩題

豈知玉殿生三秀　瑞色鮮

堯ノ時蓂莢ヲ生ス　吉瑞ノケレキ

詎有銅池出五雲　動三辰

唐ノ世ニ五色ノ雲アラハル　春元日ヲ

草芽半吐叅差碧　知春歸

クサメダチ半ダミドリナリ　トレタイカハル

花蕚初開淺淡紅　嬌朝花

ハツガキノ花ニヘウスモヽイコヘ　アサニフク

浅黄福寿艸二重大ぶん蓮

白黄そ浅黄ゑ見へ後白ゑ

八重福寿艸八重とのへども

五六重ゆく花の中ゑ黄多し

嚴粟新巢

九月ゑ種とまく　初春ゑ芽を出さ時ゑ

若草

新草　初草　初春ゑ生ぞる艸の總名

家集

春日野のみひろ原につゆぐれて

たちもとゝる春駒

詞 ワカ草さそを。ゆゑ草ゑ。ワカ草ゑ。ワカ草ゑ。

高ゑ生ゑ。みくさ。庭ゑ色ひら

くゑ。青ゑ。

物ゑ〇の萩。葛。雉の声。

ゑ。春駒。柳うげ。武蔵野

連 ゑ艸や人へ神代のいとゝ常

流ゑの岩池むとゝ

大ゑの春ゑ待小ゑ

詩 若艸七字對句　詩題

日斜江上孤帆影　艸青々

艸緑湖南万里情　花艸香

若艸五字對句　同上

遲日江山麗　野火燒不盡

山モ川モウラヽカナリ　ヤキモツキス

春風花水香　春風吹又生ス

ハルニナレハ

河梁馬首隨春草　春州深
江路猿声愁暮天　百草生

曲江春草　鄭谷

花落江隄簇暖烟　雨餘州色遠相連
春雨ノアガリニ草香輪莫輾青青々破留與遊人一醉眠
青ダル草ノ上ニ車ヲキレラセ草ヲヤブリソコナフコナカレ野遊ノ人々ニトヽメヲキアタヘントナリ

詩　同　唐羅鄴

芳草和煙暖更香閑門要路一時生
芳草ハヘヒロガリテ隱年々都ノ門ワカタズトナリ
点簡人間事惟有春風不世情
世間ニスメバ年々世話ニコノカンキヨノ春風ノフクニオノヽカスノミ

下萌　冬ノ終リトシテ發ノ氣ホノヽトして草の春の出ル
（冬）外面の寒のいまだ春消の強　春雨みどりとせの詞
（冬）新古今やうやくもゆるはるの日のまちとせんとすらん

木芽立　木の芽ともいふ下りと同一心なり

（雜）ひとりぬるこけの鞍　女羅　木芽漬
馬の木の芽かな

（雜）恒憂の人まなく　嶮人　籬堀
嶮人ハ越人

蘖　草木のきりかぶより芽を生ずるといへ何州ぶつけそもひと
説ふひこぞへとぞ春の季なり一
春の州ふつ多しれば春季といひ
秋の州木ふつ多れば秋の季なり

水菜　水菜ハ邊りより生ずるさはらん　京都近

蕓 ○蔓青の苗 人倫蔓菁の苗と食い初夏の心と食ふこんを臺子と云ふ 臺子 本草に春

(俳)てくらや医王のいのちして又たて春翠 蔓菁菜 苗二

三寸ほあ 蕗薹 寒冬花今ごの春くるると云 (俳)蕗のとう

ほっけて人の田とすく 田を金 畑を金 畑すいづまも

あれ 嵐雪

田の主とをしもとんうへと事と国ふこう

春もまが冬至ゆ五十五日ゆ主とをく

ゆ正月中比く 野人根 野菊維蒭 中ふあると 堀文根式

生類

正月の部 のくるの部有に二月ふ遣ても不苦

猫の妻 猫 二月 壮 あんども年越

前後より戀ひ初るなり春秋

二度さる春い牡牝を 嗅び秋い

牝牡と嗅んで乳で子を生とすぐ

きて寒氣といやるるものゆ秋子い

多く龍ちがて孕て六十日して

産む生まて七日いて眼とあきぎ

飯とゆ一月半もぐまい掛目百

目ぐらい有て乳をくるるもとく

もぐろ鼻の尖つひふ冷る夏至

五月の中一日ぐらい煖なくなり鼠を食ゆ

上旬よい頭より下旬よい尾より

食ゆ猫の眼まて時刻とる哥

六ゆ闇く五八王子ふ四ゆ七ゆ 林の実

ゆり九ゆ針 産ゆ唐絲こ竹嶋猫

の二種あり (ふ) 六月 ふ

まひあるくの絲こ

いいをがあるよ 仲正 (詞) かくゆ絲こ

のくゆ絲こたまるくゆ

ゆく。 簾のゆまゆ

ゆ。 (俳) 仇絲この

ゆ。 猫の眼

掌て居るん

ゆの (ふ) 青我

の尿をゆ入まいを

取猫尿決

治諸虫入耳

諸虫の入ゆ入ない猫

耳に

蕓あるいい蒜と猫

み乗れやくあるへい生葱を鼻
のうちゐ入きを猫たちまち承す

白魚 異名 鱠殘魚 ゑ台目指州
ゑ目とらゑさろゑと目
ゑ見ゑる三ヶ月ゑゑる

(詞) 夫木 ゑろゑさうゑろゑうを 宗尊親王
白ゑ魚の浦ゑ舟ゑ門ゑ入して
代を活むへさゑろゑ

(俳) 白魚や漢ゑる歯ゑなゑの蛇ゑ其角

朝鷹 ゑゑす へ鳥 鷹鳥 かり
(四) ゑゑり山 ゑゑり 狩
すゑこさん 右皆春の季 貞徳の
説ゑ是い霄に雉のゑく所を
ゑゑ置 未明ゑ行てゑ落を鳴
鳥狩ゑもゑゑすへ鳥ゑも 朝
鷹かりゑもいゑゑりゑもゑこ
さすゑいゑいもゑのゑゑゑゑや
うに竹ゑゑこの枝ゑゑゑ事ゑ
(詞) 堀川百首 やゑゑゑの雪ゑゑゑゑゑゑ
ゑゑかゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ
(詞) 狩人 狩ゑ 志賀

鷹ゑ狩ゑ。ゑゑり。ゑゑゑゑゑゑ 紙の春風 茅
枯。ゑゑる日。花のゑゑゑ 春の野ゑゑ陸。
ゑすゑ。神のゑ風。ゑゑゑ 風。ゑゑゑ 雲ゑ
(俳) 朝ゑゑ魚ゑゑゑゑゑゑ 雲ゑゑゑ 雲
朝ゑゑや ゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

(俳)蕗も捨てがたし　ありさうな蛙夕　浅蜊大きさ　ぬるう

の如くにて色はもぐみに同一事なれどひかりして美すぐ

飯鮨　異名　鱭魚正二月の内盛に出る故りに　すりたこの

肉　(俳)飯壺やうたの発句なれば　誰烈

春駒　春は諸艸生出る故駒野とあれば草と

野とあれば　野と喰む　野と哥は春の

野に　あれゆく　さまをよむ。(俳)

諸に春駒とよべば初春の春

駒舞とも　春駒舞のさまを

初春の部に　春駒。春駒舞のさまを

よんだ句　(俳)長谷のさまを　宗阿

必用　北部は正月一ケ月の天氣の見分け其外必用の事ども

破軍星向方角

暮六ツ　夜五ツ　夜四ツ
丑の方　寅の方　卯の方

夜九ツ　夜八ツ　夜七ツ
辰の方　巳の方　午の方

朝六ツ　朝五ツ　昼四ツ
未の方　申の方　酉の方

昼九ツ　昼八ツ　昼七ツ
戌の方　亥の方　子の方

右の如く正月酉の刻は破軍の剣鋒　丑の方に向ふ戌の刻は寅の方に向ふ亥の刻は辰の方に向ふ次第に順に一時宛ずつ

○酉の時　操出と事は星は夜と土ざるゆへ暮六ツ時より出初るし

破軍のくんざに向ふ方へむかい合ふ

ありて　争論　又何事にても

万事利あらず　是天地の氣合の

應ずる處なれば　能々慎むべし

○三才圖會に曰く　昔唐虞の世に正

月酉の刻に破軍　寅の方へ向

とゝへども天文に数々くわしく
て天の旋心宛昏つゝ今ゑ六口
かのゝるむ〳〵向ハかり日本ハ
神代より正月を寅の月と定ム
北斗を見ずゆれハ時刻を知る
べし晴雨をも知るべし〳〵これがため
に其星のある
所を圖ふ〳〵す

北斗七星之圖

第一の星を樞と云第二を璇と云第三
を璣と云第四を權と云魁と名第五
を衡と云第六を開陽と云第七を
摇光と云騎ゝ右三星の名を恰し云

天氣

北斗魁星の間黑く
ほや光とあるハ雲傍ふ

あるハ其夜雨ふる○北斗の前
に黄なる雲氣あるハ翌日風
ふくをしるしほや光とあるを其
夜大ふ雨ふる○黑く黄ゝ白キ
ほや光とありて長さ三丈余り
あるハ北斗をまゝひて散ざ
るハ三日の内ふる雨降ざ
るハ人安和ふる事を多
○雲氣北斗をまゝひてあり
て蒼黑さい大ふ雨ふる黑ろ
さい風多〳〵黄白ゝれハ翌日大
に熱〳〵○白氣ありて北斗の
間をさゝぎりてゝゝせハ三日の内
ふ大風ふく事を越る是正日に
ゆさゝぶいろの月ゆゑ同一事ゝ
○今月稲びろ有ハ人民ふ殃あり
○今月上旬ふ丙寅の日あるハ百姓ふ
戊寅の日あれハ秋雨多し壬寅あれハ冬雨多

天氣之候

今月上旬雨多くあるハ
ゆゑ黄〳〵中旬の

雨ふれば買物高値
ふれば春中雨多し
夏は夏雨多し○庚辛の日雨ふれば
冬雨多し○今月中雪雨あり
秋に至て日刻万事刻限を定む
出水あり 当月は寅の日巳の刻万の事をもとるに用ひべき利あり

出行作事

正月は天道南に
まして出行すべし南の方に向ひて吉あり

樂事

新を迎へ一夜のかりぐん
明行空もいつかは替るやうなのど
けく日光も美しくて父母に寿
し親族相識互に賀し心もう
き立勇し梅の色香諸木に
勝る鶯の音の若やぐ緑
の山の春もさ
けやうさうん

正月飲食 并 料理献立

禁 獣肉は月ごとに
物 ごとに魚を種
ごとに○梨蓼
ごとに○鯛魚頭
○もち鮒魚
食べ
食べ物 好 食べし
料理 汁 白うを 小もちなく
青のり 青菜
細切かき
つぶ貝
かいらぎ
ささんこ
わらび
かさ
つぶ貝
海老
あの死
鶏
たい
大根
貝
鴨
形茶
絹

あんこ　きうり　ちくあん　なすづけ　あん

きんこ　ごまつけ　ちくあん　ごまづけ

いそうづけ　せり　ちくあん　あさつけ

鳴門こんぶ　ふのり　ごまうどう　ちくあん　ごまづけ

ごまこ　ちくあん　ちくあん　ちくあん　ちくあん

汁　せり　ちくあん　ちくあん

煮物

平。大平　ぶり　ごまうどう　ぶり

流布鯛　ちくあん　ちくあん

麩のごとき物　ちくあん　ちくあん　ちくあん

ちくあん　ちくあん　ちくあん

[illegible]のこと　色銅[illegible]くし
[illegible]すく煮る〇[illegible]　[illegible]
[illegible]そう子とそぼろうす[illegible]
[illegible]けんして出し[illegible]あか湯も子
も入やがてとりて出とかへすべし
ていあし〇そろりこいろこ紙
[illegible]くゆ[illegible]てろづ
せんにさざえうく出と〇あんくう
[illegible]少しそ出と[illegible]
汁のういとうにおろし切てかいと
も身とも少し湯へ入[illegible]
時あけて水そ[illegible]其後酒
をうけ置[illegible]汁少立[illegible]

魚を入時物

いぐすす　鳥　ほうぼう　かも
うづ[illegible]　[illegible]

野菜　ふきうどあづま　ちさ
[illegible]ある　くこ　春菊
わらきんそう　こんにゃ　ふきのとう
[illegible]　ほうれん草　[illegible]
うこぎ　たんぽ[illegible]
[illegible]きのめ　うぐいす[illegible]

煮染物　重組　小鉢　[illegible]用

[illegible]　むかごひ数　推　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]

組重　五番　組番　[illegible]用

[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　[illegible]

精進料理

膳

汁

貴物

和物